

# 國學院大學學術情報リポジトリ

「評定所御定書」と「公事訴訟取捌」：  
「公事方御定書」に並ぶもう一つの幕府法：  
史料篇(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高塩, 博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001140">https://doi.org/10.57529/00001140</a>

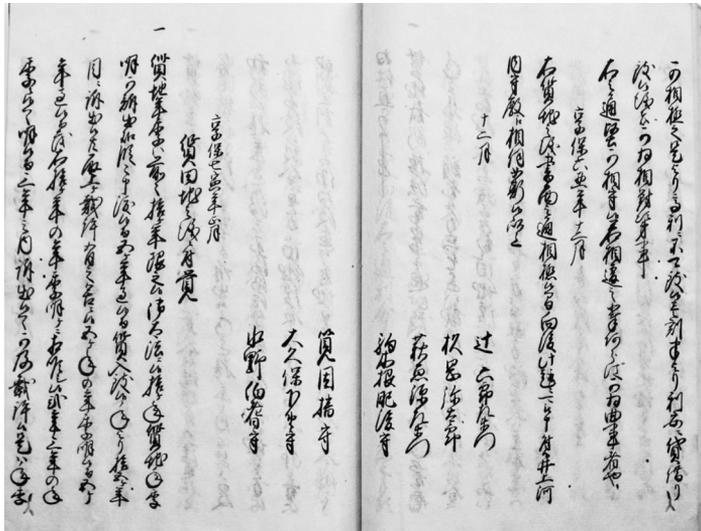
「評定所御定書」と「公事訴訟取捌」

——「公事方御定書」に並ぶもう一つの幕府法——史料篇(一)

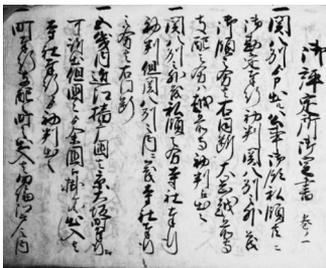
高  
塩

博

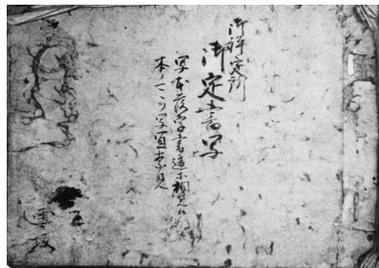




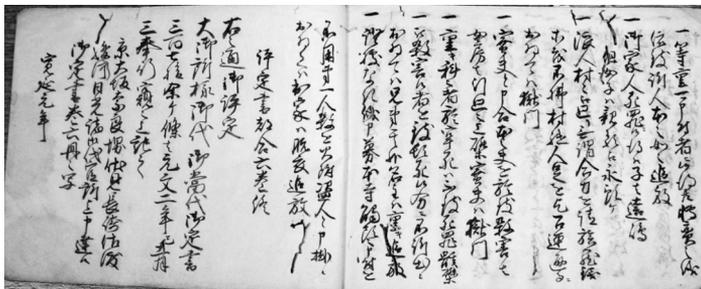
「御評定所御定書」後段、十六質田地之儀ニ付覚（本書86頁）



「御評定所御定書」本文冒頭



「御評定所御定書」（名古屋大学法学図書館蔵）表紙



「御評定所御定書」末尾（本書124頁）

《史料翻刻》

凡例

一 本稿は、拙稿「評定所御定書」と「公事訴訟取捌」―「公事方御定書」に並ぶもう一つの幕府法―の史料として、左記を翻刻するものである。

一 「御評定所御定書」一冊（著者蔵）

二 「御評定所御定書」六卷一冊（名古屋大学法学図書室蔵奥野彦六氏旧蔵本、架号三三二・九―G五五九）

一 一の「御評定所御定書」一冊は、縦二八・五糎、横一九・七糎の美濃本にして、墨付六二丁である。その表題は題簽による（口絵参照）。本書は前段（二〇丁）と後段（四一丁）とから成り、前段を「評定所法規集（仮称）」と呼ぶこととする。本書は、本文中に寛永を寛政と誤記する箇所が存するので、寛政年間（一七八九―一八〇〇）以降の書写である。

翻刻に当たっては校合を施した。前段の「評定所法規集（仮称）」の校合には、主として「公裁之御条目」（明治大学図書館蔵「公裁録」第三冊所載、架号三三二・一五―一六）を用い、さらに「公裁書并御定法」（著者蔵、「当時御法式」（荻田佳寿子『江戸幕府法の研究』昭和五十五年、巖南堂書店、四八六―五〇三頁所載）をも参考とした。又、後段部分の校合には、「徳川禁令考」後集および「御触書寛保集成」などを用いた。

一 二の「御評定所御定書」六卷一冊は、縦一三・八糎、横一八・九糎の横帳にして、本文四六丁である。表題は、表紙の打付書に「御評定所御定書写」とある（口絵参照）。各巻の表記としては「御評定所御定書」（巻一・六）、「御評定所定書」（巻二・四）、「評定所御定書」（巻三・五）と記される。以下、本書の内容を「評定所御定書」と呼ぶ。本書は、表紙に「写本落字書違等相見候得共、本ノマ、ヲ写宜索見 雪坂」とあり、巻末に「京・大坂・奈良・堺・伏見・長崎・佐渡・駿河・日光、諸御代官所迄申達候御定書卷六冊之写 寛延元年」と記されている。寛延元年（一七四八）の書写本そのものか、もしくはその転写本である。

校合には、主として「評定所御定書」（国立公文書館内閣文庫蔵「雜留」第十四冊所載、架号一八一―三九）および「御評定所御定書」（実践女子大学図書館奥村藤嗣文庫蔵、架号三二二・一五―H九九）を用い、さらに「公裁一件」（明治大学図書館蔵、架号三三二・一―二八）、「評定所御定書」（著者蔵）、「庁政談」（『近世法制史料叢書』第三、昭和三十四年、創文社、三二五七―二七六頁所載）なども参考とした。

一 「評定所御定書」は、「評定所法規集（仮称）」をもととして、これを増補した幕府法である。両者の法文を比較対照しやすくするため、項目名を補い、波線・傍線を付すという加工を施した。すなわち、一および二における「        」の項目名は、編者が補ったものである。一の「評定所法規集（仮称）」における波線部分は、二の「評定所御定書」が継承しなかった法文である。二の「評定所御定書」における傍線部分は、増補の法文および増補の規定などである。

一 翻刻に際しては、判読に便ならしめるために原文に読点・並列点を施し、項目ごとに一行を空けた。また、校合の文字は（        ）をもって示し、虫損や破損の文字は□、判読できなかった文字は■をもって示した。

一 算用数字とゴシックの漢数字は、編者の与えた法文番号と項目番号である。

一 御評定所御定書 (著者蔵)

(表紙)

御評定所御定書	

(扉)

御評定所

- 載許之一件
- 検分書之定
- 同決談之事

覚

一 (国郡境論)

- 1 一 国郡境に、川附寄之例は不用之、
- 2 一 国郡境ハ、官庫之絵図或は水帳次第、
- 3 一 官庫之絵図に、国郡境の山を双方より書載之、双方共外於無証拠は、論所の中央可為境、
- 4 一 (一 国郡境、峰通方谷合見通可為境、)
- 5 一 官庫之絵図に、論所を半分雖載之、一方ハ全載、外ニも証拠於有之は、勿論全載之方理運たり、
- 6 一 国郡山論、水分岑通限境たり、
- 7 一 先年之載許絵図相損シ、仕直シ度由於訴出ハ、相手方之絵図相渡可為写、訴状も裏書一座之印形遣之、

二 山野入会村境論

- 1 一 双方証拠於無之は、大道筋或は川の中央、又は峯通谷合見通シ、水帳通り古キ田畑等境たり、
- 2 一 死馬捨場等ハ、村境の不及沙汰、近村可為入会、
- 3 一 内山居林等ハ、地元の外入会禁之、
- 4 一 内山境雖無之、地元の古田畑等有之ハ内山たり、

- 5 一入会より数拾年開発雖致、地元より於願後(訴)は、不及荒之、年貢は地元村え入会より可為取之、
  - 6 一地元たりといへとも、近年新開発(ノ)新林等ハ可為荒之、
  - 7 一入会場え之道雖多と、入会の証拠に不用之、
  - 8 一名田同意の茅野等、(地主)不得心之上は、外より新田等願候共、無謂外えは不免之、
  - 9 一入会にて無之草札等之場は、田高二応じて茹之、
  - 10 一入会野新開発等は、高に応じて割合之、
  - 11 一新開立出たり共、理不尽に於伐荒は、過料、
  - 12 一他の入会場え紛入、茹取ニおみてハ、過料、
  - 13 一秣場えの仮橋、他の往来禁之、
  - 14 一別村二分ヶ候共、官庫之絵図(郷)え帳次第、
- 三 漁獵海川境論
- 1 一川ハ附寄次第、流にしたかい境たり、
  - 2 一川向ニ有来ル地面は、任先規ニ飛地可進退之、
  - 3 一漁獵藻草、中央限取之、
  - 4 一藻草ニ役錢無之、揚場ニ無差別、地元次第取之、  
カルモクサ等於滯ハ、新規に漁獵禁之、
- 5 一御菜鮎并運上於納ハ、川通他村前々無差別、入会鮎漁致之、無役之村ハ村前可限之、
  - 6 一鮎漁入会、国郡境無差別取之、
  - 7 一藻草、魚獵場に(障ニ)おいて(ハ)禁之、
  - 8 一磯獵は地附(根附)次第、沖は入会、
  - 9 一小獵ハ近浦の任例に、沖漁於願は(新規ニ)免之、
  - 10 一浦役永於有之ハ、他村前々浦といへとも、魚獵入会(之)例多シ、
  - 11 一浦役永於無之ハ、居村前の浦たりと云ふ共、魚獵禁之、
  - 12 一船役永ハ、沖漁或ハ荷船可為繫役事(繫)、
  - 13 一海境の分に木式本建ル例多シ、一本ハ可為浜境・細キ場境(網干)、
  - 14 一運上船の役は、磯より沖え凡疋里程限之、(改)
  - 15 一関東筋アツ鯨繩、諸獵之妨ニ成候ニ付停止之、
  - 16 一壱本針にて鯨釣り候事ハ、禁外たり、
  - 17 一入海は、両頬の中央限之、林並ハ、村境見通シ可為境、
  - 18 一鯨獵は、拾四五(之内)町可限之、

四 田畑禁論川附寄

1 一御朱印境目に数年百姓開来田畑并家居等ハ、可為致来(有イ)通、年貢ハ任古例、越石等ハ其神社領え収納、夫ハ越石地頭え納之、

2 一川附寄之事、大水ニテ自然ニ川瀬違、高下(外)の新田(地)、又ハ見取場(ニ)小物成場・秣場・河原・埜原地等之無高之地所ハ、附寄次第也、然共、川除等の仕形(人力)ニ依之、分手段を以川筋為違候類ハ、附寄之例を以不用儀も有之事ニ候、因茲新堤築出シ等、其村之勝手ニ任セ、川中え仕出シ候事ハ制禁たり、勿論高内之分ハ附寄之不及沙汰、川向之附寄地を飛地ニ進退申付ル定法也、

3 一本田高の川欠ハ、附寄之不及沙汰、地境の限り川向の附寄之地を欠地反別ニ応し、飛地之積り渡之、

4 一御朱印地畝歩不足の類ハ、数多依有之、訴訟不及(取上)之、

5 一検地の地、先見取場等地頭より寄附たりといふ共、於無証抛ハ地頭え取上之、年貢は可為御蔵入、

6 一他の地先を於囲込ニハ為返之、仕方於不埒ニハ、不納

之年貢可為納之、

7 一居村之内地内村前等(マヤ)(三)、他所より竿請の新開有之、其新開之地先たりといへとも、居村の地内ニおゐてハ不足(立)之、新開之外綺事禁之、

8 一先地頭の除地は、当地頭の可為心次第、

9 一双方為持地証拠於無之は、公儀え取上、村中又ハ名主え預ル、

10 一木陰は双方立合伐之、

11 一永小作并数拾年預り来地面ハ、無謂取上候儀禁之、

12 一竿請の田畑、切崩ニおゐてハ、手鎖或は過料、

五 堤堰用水論

1 一御領私領組合普請、私領分計自普請於願ハ(マヤ)免之、

2 一(一)當時用水不引といへ共、古来よりの組合離候儀禁之、

3 一往来橋普請、組合新規ニ申付ル例有之、

4 一用水人足諸色組合惣高に割合之、

5 一用水は田反別多少ニ応シて可為(刻)割、但、水門之尺寸を定、

6 一（一）領之時、水代不出之といへ共、他領に分ルに於ハ新規ニ出之、

7 一用水論は容易ニ不取上之、双方（之役人）立合滞無之様ニ可為濟之、

但、十二ヶ月を過、於訴出ハ不及沙汰、

8 一新堤新田、双方役人立合、（無）滞<sup>（滞）</sup>ニおゐてハ為取上之、

9 一堤上置<sup>（重）</sup>、障ニ於有之は禁之、

10 一（一）畑成田、用水ニ障ニ於てハ禁之、

六 証拠（証）跡用不用

1 一先地頭領主之帳面書物、其外古来之書付無印形といへ共、於慥成ハ用之、

2 一名所字無之証拠は、不用之、

3 一他<sup>（水敷）</sup>の帳面書物等論所の証拠と偽之、字等於書替ルには、死罪或は遠島、

4 一慥成書物等有之処ニ、不埒之証文等取之、為証拠と、於差出ニハ、戸<sup>（戸）</sup>或は所私、

5 一証拠ニ可致巧ニ不埒之書付等取之、於差出ハ戸<sup>（戸）</sup>、或

は名主（庄屋）之役儀取上之、

七 馬繼河岸市場論

1 一馬繼（場）、国絵図可為次第、

2 一人馬相對ニて助合来候上は、公役之外不差障<sup>（滞）</sup>可努之、

3 一人馬繼の場所え寄、人馬出之といへとも、私（二人）馬繼禁之、

但、馬繼之場、相對は格別也、

4 一人馬繼、往來之外狼ニ脇道通路停止之、

5 一諸荷物直売、手馬を以附通分ハ、本海道たり共無構可通之、脇往還は勿論也、

6 一商人え売渡候諸荷物、手馬ニて馬（繼）場を附通シ候事禁之、

7 一双方無証拠馬繼場は、双方月代り馬繼可致之、

8 一脇道の分ハ、旅人勝手次第馬繼可為致之、

9 一於脇道ニ、御朱印の外雇人馬不足之分ハ、可及其断、

10 一往還荷物、理不尽ニ於差押ハ、過料、

11 一大坂荷物ニ京都之荷物入持下り、京都之飛脚屋及難儀候由ニて、道中ニて理不尽ニ荷物押え切ほどき候へは、

古例獄門、

- 12 一中絶の市、障有之ニおゐてハ禁之、
- 13 一私ニ新市建候事禁之、但、於無障ハ免之、
- 14 一市場近所え無届して新町屋停止之、
- 15 一川岸場は、川岸長次第なり、
- 16 一市場之者、<sup>(は)</sup>村鑑次第なり、
- 17 一川岸帖ニ不載分者ハ、地頭并村用之荷物<sup>(ヤ)</sup>之<sup>(マ)</sup>外ハ、運送禁之、

八 跡式養子離別後住論并引取人

- 1 一父養子致、跡式於極置ハ、実子たりといふ共、跡不<sup>(繼)</sup>綺<sup>(繼)</sup>之、
- 2 一父跡式極於不置ハ、血筋近きものを可為相統之、
- 3 一夫死後、後家之儀外え於嫁入は、先夫之名跡可取綺様無之、筋目<sup>(筋)</sup>のもの可相統之、
- 4 一遺言状之通家屋鋪讓分候ては、跡式断絶、或は母ハ妾<sup>(之)</sup>(二て)外え嫁入候由親類雖申出、悴無之相果候者は家財ハ母之可為心次第上は、遺状之通母えも(跡式分

5 一重病之節、一判之遺状は不用取之、

- 6 一跡式相統之総領於差置ハ、外の悴え跡式可讓之と(の)遺状は不法也、雖然、遺状於慥成は、有金家督之悴七分、外之悴三分、家財田畑等(ハ)家督之悴可為相統之、
- 7 一<sup>(家出)</sup>致出家、養父死後立帰<sup>(は)</sup>り候養子ニて、跡式相統難成事、
- 8 一当人相果、借金有之跡式、親類の内(ニも)(望)無之ニおゐては、借金方え家財可為分散事古例、
- 9 一先住後住之遺言有之所、外之出家於後住ニ可居之旨雖申、法式は<sup>(之儀)</sup>且方可差綺之謂無之、不及沙汰、
- 10 一当人相果、跡式之儀遺状も無之、親類等不埒之儀於致<sup>(筋)</sup>訴論は、公儀え跡式取上之、
- 11 一婿養子離縁之上は、出生之男子は、夫の方え可引取之、引出物は相互ニ可為返之事、
- 12 一夫死後、後家え養子当り悪敷といへ共、於不慥ハ、後家心儘ニ可致離縁之筋無之、
- 13 一夫の極置跡式を、夫死後、(後家)心儘ニ(外え)可讓分<sup>(筋)</sup>ケ筋無之、

- 14 一 婿養子父子不和にて、実父方え立帰罷在、去状不遣差置、妻を引取度旨申といへ共、無謂ニ付不及載許、
- 15 一 婿遺跡、妻養子之氣ニ不入、離縁之上は持参金ハ不及載断、養子之諸道具ハ、去状遣候上にて可為返之、
- 16 一 実子出生以後不和にて、養子出家致といへとも、父不埒ニ付、養子え可(為)引渡(取)之、
- 17 一 養父仕形悪敷事にて、養子穩便ニ(無)之、実父方え於立帰ニは、持参金(相對)は格別、不及載断、
- 18 一 自分之悴(を)於養子ニ可(遣)巧、離縁之於致腰押ハ追放、
- 19 一 簪養子不縁たりといへとも、絶縁之証文も不取替、簪養子より離別状も不取替、剩双方外え片付之上、及訴論類ハ不埒之仕形ニ付、持参金 公儀え取上之、
- 20 一 養子を妨候ものハ、品ニより牢舎古例、
- 21 一 妻之諸道具・持参金相返上ハ、離別之儀夫之可為心次第、
- 22 一 外之女を後妻ニ可致巧ミ、於離別、右女を妻ニ為致候儀ハ勿論、出入ともに差留ル、
- 23 一 懐胎候共、離別之儀は夫之心次第也、出産之上、男子ハ夫之方え可引取、女子は妻之方ニ可差置之、
- 24 一 妻儀、親方え帰居候儀、三四年過、夫於訴出ハ、願後レ(難立)、乍然去状不取置、不埒ニ付、一応夫の方え呼戻させ候上、離別状可為渡之、
- 25 一 離別状不遣といへとも、夫方より三年以来通路於致ずニは、外え縁付候共、先夫の申訳難相定事、
- 26 一 離別之証拠無之、女房親元え参り居相果といへとも、諸道具・持参金田畑等不及返之、夫之可為心次第、
- 27 一 悴相果候故ニ、娘(を)差戻シ候類ハ、持参金之不及沙汰、尤諸道具は可差戻事、
- 28 一 先夫離別之事、慥(承)承(承)承、去状も無之、親ニも得心不為致、女と申合、理不尽ニ外え引取ニおゐてハ、重過料、(士ハ)品ニ追放、
- 29 一 右女被離別候共、為自分と立退、親えも不為致同心、致家出去状も(不)差越、内外之男を於持ニは、髪を剃、親え渡、以後外え片付候事ハ親の心次第、不儀之男方え通路差留之、
- 30 一 (右)不埒之取持人は、過料、
- 31 一 女房得心も不致、衣類等質ニ遣ニおゐてハ、不縁之事、妻の(親)心次第也、

32 一女房難添子細相立、於致出家<sup>(家出)</sup>ハ、女之親元え<sup>(家)</sup>諸道具等可為返之、

33 一去状不取返上ハ、又添之儀不及載断事、

34 一養子合の女房、夫を嫌イ致出家<sup>(家出)</sup>、比丘尼寺え組合<sup>(組合)</sup>、比丘尼三年勤之暇出候旨訴出ハ、実父方え可為引取之古

例、

35 一夫を嫌、髪を切候て成共暇を取度由女房申、又は夫え

申掛致類ハ、比丘尼ニなり縁為切古例、

36 一久離帳ニ付置といへとも、被致久離候者の子、引取人

於無之は、久離之無差別、共親類え預ケ候事、

37 (一) 欠落之届致といへとも、勘当之者ニても無之、外に

可引渡者無之におゐてハ、引渡之、)

38 一離別の事断を請、(女之)親欠落、引取人於無之ハ、溜

り預ケ、

39 一離縁之上、町ニて同商売於致ハ、養父え対シ不遠慮ニ

付、養子所を(為)立退ル、

40 一及出入、沽券証文於無之ハ、家屋敷 公儀え取上之、

41 一讓証文計り致所持、沽券不致所持、元地主願たりとい

ふ共、元金為差出、讓証文と引替之上、家屋敷元地主

え可為渡之、

### 九 離旦之事

1 一無謂離旦不為致事、

2 一旦那寺ニ不似合無慈悲(成)致方ニ付、於離旦ハ帰旦之

不及沙汰事、

3 一心願有之、其身一代於致宗旨改<sup>(改宗)</sup>は免之、

4 一父の遺言於有之ハ、改宗心次第たるべき事、

5 一祈願所は、帰依次第なり、

6 一離旦の上石塔迄引取候処、年数過於申出ハ、帰旦之不

及沙汰事、

7 一離旦の証文押て(印形)取之ニおゐてハ、所払、品ニよ

り(輕キは)戸ヅ、

8 一女子は、母之宗門ニ成ル例無之、

9 一住職出入雖有之、宗旨証文印形可指延謂無之、寺附之

印形を以、証文可為差出事、

10 一前菩提所え無断、宗旨証文於致印形ハ、戸ヅ、

11 一開基<sup>(カイキ)</sup>旦那ハ、過去<sup>(カクゴ)</sup>状次第、

12 一後住之儀、開基旦那ハ格別、旦方<sup>(ヒ)</sup>不為取綺事、

- 13 一旦方を疑ひ、宗旨印形於滯ハ、逼塞、
- 14 一新寺院於(致)寄附は、地面 公儀え取上之、其所名主  
与頭、戸<sup>ズ</sup>、
- 15 一寺法を差綺、本寺よりの触書、名主印形を以、門下え  
相触ニおゐてハ、役儀取放戸<sup>ズ</sup>申付ル、
- 16 一我儘ニ寺号を於引替ハ、戸<sup>ズ</sup>、
- 17 一前菩提所<sup>(承)</sup>於挨拶も不届承、於(為致)髮剃ハ、其寺院逼  
塞、
- 18 一墓所も無之一村之助合ニて相統之堂地ハ、寺号停止  
之、
- 十 質田畑論借金之事
- 1 一名主加判無之証文は、取上無之、質置主名主之時は、  
組頭加判無之ハ、取上無之、且酉年以來借(金)ニ准  
シ、
- 2 一水帳と相違之質地証文ハ、不取用、借金ニ准シ、
- 3 一年久敷証文ニても、享保年中之年延(添)証文於有之  
ハ、定式之質地濟方申付之、
- 4 一及出入、肩書出書入<sup>(於出)</sup>ハ、手鎖申付之、
- 5 一質(ハ)地或ハ他之小作他之稻、理不尽ニ苅取、又は作  
附手入於致ニハ、戸<sup>ズ</sup>(或ハ)過料、
- 6 一名主証人等乍存、於不差留ハ咎之、
- 7 一無証拠不埒之証文を以、及出入ハ、地面 公儀え取上  
之、永代売頼納(ト)同断、
- 8 一宛所無之証文(ハ)不取用、年号無之も同断、
- 9 一年貢未進等於有之ハ、田畑質入致といへ共取上之、売  
払代金を以地頭方え年貢未進皆済、殘金於有之ハ金  
(主)え割賦之、
- 10 一武士方借金、日切申付(置)候処、跡式断絶ニ付、一類  
之内別領地え(被)下候方より切金為皆済度由、金主雖  
申出<sup>(マ)</sup>ハ、不及沙汰古例、
- 11 一質地年季(之内)、不請返候は、致流地ニ候段証文有之  
質地ハ、証文之通り申付ル、  
(※編者注、前条と本条は、配列が転倒か)
- 12 一養子之借金、養父之家来手形雖致置、養子之実父方え  
相返候上<sup>(届)</sup>は、不及沙汰古例、
- 13 一先住借金有之段当住不存、本寺触頭方も其段不為申聞  
候ニ付、於致入院ハ、後住不及沙汰<sup>(返済)</sup>、先住(之)弟子并

証人方も可為濟之古例、

14 一先住之借金、当住不存(旨申)といへ共、先住借金も有之ハ入院致間數旨於不(相断ハ、当住(又)ハ証人方も可為濟之(古例)、

15 一車借錢日なし錢取上無之、品も双方咎之古例、

16 一無尽金并惣て仲間出入、取上無之、

17 一兩人連判にて金子借請候処、忝人於相果ハ、半金為濟之、返金致といへとも請取書も不取置、当人欠落致証擲なけれハ、(残り)忝人より可為濟之、

18 一(証文附有之貸金ニ候哉、代金ニ有之哉、於不相決ハ半金為濟之、)

19 一通例之借金を奉公人請状ニ認、給金と申立といへとも、実ハ奉公人にも有之、不埒ニ付訴訟不取上、不埒之証文為致候ニ付不届、為過料借金取上之、

20 一御朱印地田畑、質地ニ取候事停止之、

21 一取上田畑御払之時、双方無証擲ニ付取上之類ハ、(其年之)作附之分は作附候者方え取納之、尤年貢諸役勤ル、

十一 載許破掟背

1 一載許難渋之者は、入牢(牢舎)或ハ手鎖申付、載許請可申旨於申出ハ(赦)免之、

2 一難立訴訟(強訴)於致ハ、閉門・戸ノ、田畑取上所払、或ハ追放・遠島、

4 一先載許を疎ニ致ニ付、於及曲訴(再)ハ、名主ハ役儀取上ケ戸ノ・所払・過料申付ル、

5 一地頭又ハ支配頭之有裁許、及難立儀、於及強ク訴ハ、戸ノ・所払・過料、

3 一先載許を於申紛ハ、戸ノ・手鎖或ハ過料、(或)又ハ追放(※編者注: 本条は本来、第2条の次に配列されるべきか)

6 一立会絵図久敷於滞ハ、牢舎、於致訴訟ハ赦免之、

7 一追放所払之御仕置、於不請ハ、遠島又ハ追放、

8 一掟を背脇差帯候者は、脇差取上、手鎖申付ル、

9 一町人百姓刀を於帶ハ、江戸在所追放、

10 一名主役被取放、浪人の由偽り於致帶刀ハ、追放、

11 一捉飼場ニもち繩於張ニハ、過料、其所之名主ハ、戸ノ或は呵り、

12 一捉飼場ニ殺生人有之所、於不相改ハ、村中え過怠ニ鳥

- 番申付ル、尤春<sup>ら</sup>秋迄<sup>迄</sup>ケケ年勤させ、其所の野廻り於不念ハ、（野廻り）役取放之、
- 13 一 飼附之鳥於追立ハ、戸<sup>ノ</sup>、或は追立シ者を為過怠（名主<sup>ニ</sup>）預<sup>レ</sup>リ、見出シ候者は御褒美（金）被下之、
- 14 一 隠鉄炮於致売買ハ、田畑取上ケ所<sup>ノ</sup>、口入（人）ハ過料、名主与頭、（不相改）依不念過料、村中ハ過怠ニ鳥番人申附之、
- 15 一 御鷹場ニて隠鉄炮於打ハ、遠島、名主ハ田畑并役儀取上、組頭も不念<sup>ニ</sup>付過料、村中（ハ）過怠ニ鳥番人申付之、鉄炮打召捕候者は、御褒美銀被下之、
- 16 一 遊者留置候名主ハ、役儀取上ケ戸<sup>ノ</sup>、与頭ハ過料、
- 17 一 欠落者を於困置ハ、過料或は戸<sup>ノ</sup>申付ル、
- 18 一 願立候義を於致願捨<sup>ニ</sup>ハ罷帰<sup>ニ</sup>ハ、過料、
- 19 一 奉行所（之）申付之由偽り於申ニハ、其品輕キハ過料、
- 20 一 度々指紙を請、不參之者、其品輕キハ過料、或ハ為過怠<sup>（半舍）</sup>宿預ケ或は入牢、
- 21 一 相手相果候処押隱シ、相手取裏判於取之ハ、過料、
- 22 一 （一）難立義共、致強訴おみてハ、其品輕キハ過料、
- 23 一 御代官地頭ニて吟味之内、於致直訴訟<sup>（マヤ）</sup>ニハ、過料、
- 24 一 二重質取遣候者は、過料、
- 25 一 不埒申出、相手大勢於呼出<sup>ニ</sup>ハ、過料、
- 26 一 神木たりといふ共、入念地<sup>（念）</sup>ニて理不尽ニ於伐払<sup>（採）</sup>ハ、神主逼塞、
- 27 一 他村之者、其村之者ニ成、（出入<sup>ニ</sup>）推<sup>（擧）</sup>て於訴出ハ、戸<sup>ノ</sup>、
- 28 一 重制禁之儀雖致、前方ニ於相止ハ、過料、
- 29 一 其料雖無之、詮議之節、於影隱者ハ、戸<sup>ノ</sup>、
- 30 一 目安裏判似せもの、由申之、奪取ハ、田畑家財取上、所<sup>ノ</sup>、
- 31 一 証文ニ人主・請人之無差別ハ、奉公人召抱候者、戸<sup>ノ</sup>、
- 32 一 押て縁組之事於申募ハ、本人取扱<sup>（持）</sup>人共ニ、手鎖、
- 33 一 子方之内悪党ものたりといふ共、殺害之仕方於不埒<sup>（任）</sup>ハ、戸<sup>ノ</sup>、右之託言も可致答<sup>（任）</sup>之者、其場<sup>（任）</sup>え出合候所<sup>（任）</sup>於無其儀ハ、所<sup>ノ</sup>、
- 34 一 追放之儀を乍存、御構之地ニ於差置ハ、所<sup>ノ</sup>、
- 35 一 御法度之宗門<sup>（旨）</sup>をたもち勸候出家頭取ハ、遠島或ハ追放・取<sup>（所）</sup>払、改宗の者ハ、誓詞の上赦免、右ニ付仕方不

埒(之)者ハ、戸<sup>ノ</sup>・過料、

36 一役人<sup>ニ</sup>賄賂指出、其品輕キハ手鎖或ハ役儀取上之、

37 一於御成先<sup>ニ</sup>無筋之直訴<sup>(マツ)</sup>於差上ルハ、所払、

38 一出家・願人・座頭・穢多・非人、從 公儀御仕置ニ不  
及類ハ、其頭・触頭等<sup>ニ</sup>夫々引渡、法之通ニ可致旨申  
渡ス、

39 一人殺之儀、内証ニテ濟候<sup>ニ</sup>不訴出者ハ、所払、名主ハ

役儀取放シ戸<sup>ノ</sup>、組頭も同斷、内証ニテ葬候寺院ハ、  
<sup>(閉門)</sup>  
戸<sup>ノ</sup>、

40 一手負人を於不訴出ハ、五人組ハ過料、名主ハ戸<sup>ノ</sup>、

41 一閉門赦免可申付(と)呼出候処、月代剃於罷出ハ、又閉  
門、

42 一質置主ニも不為知、証人より質物於請返ハ、過料、

43 一割判も不致持參候処、質物於為受(返)ハ、利分公儀<sup>(銀)</sup>え  
取上之、

44 一当分之事ニ証文致ス処、金主借金之代ニ建家等無斷卒

爾ニ於取壞ハ、(二元のことく)致造作可為返之、

45 一商売仲間之法を於背ニハ、過料、

46 一口論の場え出合、於致打擲ニハ、身代限り取上ケ、所

払、

47 一過料申付(候)者相果、悴<sup>(無)</sup>於有之ハ、五人組ニ為出之、  
相果候届ケ延引之名主ハ、押込、

48 一新規ニ発<sup>(卷)</sup>ヲ仕出、村々<sup>ニ</sup>於送遣ハ、頭取并其村之名  
主・与頭、追放古例、

49 一無下知村々方人足為出遣といへとも、於質錢相渡ハ、  
出牢(古例)、

50 一先触を書違、村々ニテ無用之用意致ニおゐてハ、追放  
古例、

51 一可割返分を其通ニ致置故、於及出入ハ、名主役儀取上  
ケ戸<sup>ノ</sup>、与頭も同斷、

52 一弟子不埒ニ付、師匠方家業構候儀可為心次第事、

## 十二 御仕置者

1 一過怠又ハ吟味之内手鎖放シ候者ハ、品ニ<sup>方</sup>死罪或ハ遠  
島・追放、被頼はづし遣候ものも同罪、<sup>(断)</sup>

2 一死罪ニ可成者、致欠落、其身方<sup>方</sup>奉行所<sup>ニ</sup>於出ハ、一  
等を免、遠島、

3 一入牢の者、吟味之上科無之ニ相決候処、於牢拔出ニ

- ハ、遠島、
- 4 (一)地頭<sup>ら</sup>追放成候所、及強訴おゐてハ、遠島)
- 5 一重き事ニ付、跡形も無之儀を於申懸ニハ、家財取上  
ケ諸<sup>所</sup>払或ハ重キ追放・遠島、軽キ儀ハ過料、若過料滯  
ニおゐてハ手鎖、
- 6 一出家え密通之由不成慥儀を於懸<sup>(申掛)</sup>申ハ、追放古例、
- 7 一押て致密通候出家ハ、死罪、女ハ得心之儀無之といへ  
とも、不埒ニ付髪<sup>を</sup>剃、親類え相渡ス、
- 8 一御代官地頭え於背ハ、其品軽キハ過料、申合候所を於  
立退ハ、過料之上戸<sup>ハ</sup>、其品重キハ追放、
- 9 一御代官所を背、(所を)立退、私領城下え相詰、於致訴  
訟ハ、頭取之者、獄門或は死罪・遠島、
- 10 一出家ニ不似合無謂儀携、品々於申出ハ、袈裟取上ル、
- 11 一養父同前之者え不慥成儀を於申掛ニハ、手鎖、
- 12 (一)親殺害ニ逢候時、外ニ隠居候悴ハ、遠島、)
- 13 一下女為自分と首縊相果候を、女の親類共、主人を盗人  
と申なし、下手人の儀於及強訴ニハ、獄門古例、
- 14 一水帳を押隠シ、過米於取立ルハ、名主、死罪或は遠  
島、
- 15 一百姓之下女密通致ニ付、兩人共ニ主人殺害<sup>(切殺)</sup>といへと  
も、百姓ニ不似合仕形ニ付、戸<sup>ハ</sup>古例、
- 16 一主人の女房臥居(候)処え忍入、又ハ艶書<sup>ウツ</sup>於遣ニハ、死  
罪古例、
- 20 一主人<sup>(下人え)</sup>より不法之儀申付候主人ハ、品ニより遠島、  
(※編者注、本条は本来、第19条の次に配列されるべきか)
- 17 一主人の後家と下人、於致密通ハ、(後家)下人(共ニ追  
放古例、)
- 18 (一妻下人と致密通於てハ、下人)ハ引廻シの上獄門、  
<sup>(妻)</sup>後家ハ引廻シの上死罪、
- 19 (一妻と不作法致ニ付、男女共切殺といへ共、妻不極お  
ゐてハ、妻敵討候とハ難申ニ付、追放古例、)
- 21 一<sup>(有)</sup>致方も無之儀を楚忽之仕形ニて於致殺害ハ、遠島或ハ  
追放申付ル、
- 22 一預りの御林を兄致盗、剩御林守(え)打懸ニ付、(弟)不  
得心<sup>(止)</sup>之事打殺といへ共、兄え対シ楚忽ニ付、追放、
- 23 一女房致欠落、又外之者と夫婦ニ於成ニハ、新吉原え永  
く下置、
- 24 (一主人之娘と申合ニて誘出ニおいてハ、所払)

25 一夫有之女、奉公之内傍輩と於致密通ハ、男女共ニ死罪

(古例)、

26 一夫有之処、外之者と於夫婦ニ成ニハ、(死罪)、夫有之

儀を男は不存といへとも、追放古例、

27 一煩<sup>ワツライハヤリ</sup>流行候(由)虚説(を)申出、札并無実之薬法を於致

流布ハ、引廻シ之上死罪古例、

28 一伯父え対シ、無筋之儀を於申出ニハ、死罪、

29 一盗物(と)乍存売払、又ハ質物ニ置(遣)候者は、死罪、

30 一橋其外金物等盗取候者ハ、入墨之上重キ追放、

31 一謀書謀判似金銀致候者ハ、引廻シの上獄門、或は磔、

32 一武家の供ニ<sup>(突)</sup>附当リ、或ハ雜言申候者は、追放、

33 一重キ科の者も、悪党(者)の指口於致ハ、遠島、

34 一横取金、償不埒之者ハ、死罪、

35 一武家方家来、町人を切殺シ立退候者、同家中え尋申

付、疵平癒候得<sup>(共)</sup>は、親類え療治代申付ル事、

36 一盗可仕と忍入候ものハ、死罪、

37 一牢屋焼失の時、致欠落候者、御尋召捕死罪、或は牢

舎

38 一辻番人、博奕の宿致シ并捨物<sup>(捨)</sup>を不訴出、私欲仕候者

ハ、引廻の上遠島(或ハ)死罪、

39 一金子拾ひ取、捨主出候得共、半分拾ひ候者え被下、主

不知候(ハ)、不残被下、

40 一町人大小を帶<sup>(帯)</sup>、奉行所え巧於仕ハ、引廻シの上獄門、

41 一輕キ事ニ付、似手紙認メ候者ハ、家財取上の上所払、

42 一主人の女房え密通の上、右女を可切殺と元主人(方)え

踏込候者は、引廻シの上獄門、女房は死罪、

43 一拔身を持居候者を、踏込召捕候者ハ、御褒美被下之、

44 一主人の妻と致密通候処、下人弁命<sup>(助)</sup>之儀、夫願出ニ付、

非人手下ニ申付ル、(女ハ新吉原え年季不限渡、)

45 一下請状致謀(判)候ものハ、死罪、

46 一御構(之)地え立歸り候者は、死罪(或ハ)遠島、人を切

殺候者、獄門、

47 一謀判を致見遁シ、礼金等取候者ハ、獄門、

48 一輕キ御扶持人、獄門等ニ<sup>(ママ)</sup>逢候時、悴追放、

49 一盗可致ため、古主の屋鋪え忍入候者は、入墨之上重キ

追放、

50 一奴ニ可成女、悪事有之者の(儀)を於致差口ハ、赦免、

51 一鹿忽の仕形にて、元召仕之女を切殺候者ハ、江戸払

52 一人の妻の母切殺、密通の上之由雖申、無証拠ニ付、引廻シ上死罪、

53 酒狂之上伯父ニ疵付、平癒候共、甥ハ死罪、

54 一女房ニ疵付、平癒候共、理不尽ニ付テハ、門前払、

55 似葉種拵候者、引廻シの上死罪、或ハ獄門、

56 一御家人死罪ニ候得ハ、子は遠島、

57 一浪人村々え廻り、無謂合力を請、旅籠錢等も不払、村

繼人足を乞、召連於通者、重追放、

58 一養父の対母（對義父母ニ）え不敵不幸之於仕形ハ、重キ追放、

59 一密通夫と申合セ、本夫を於致殺害ハ、女（房）ハ引廻シ

之上磔、密夫ハ獄門、

60 一（重罪之者牢死におゐてハ、死骸磔、）

61 一被殺害候者を頓死分ニ致、於不訴出ニハ、兄弟・名主

等ハ、重キ追放、其外所払、

62 一組下の者、博奕之宿為仕、（宿錢之内）取（之）、剩御

代官（所方）呼使ニ参り候家来大勢罷出、致打擲処を

（不）差押え、殊ニ乍存不訴出、其上頭取之者を致指

図、欠落為仕候名主ハ、其所（ニおゐて）引廻シの上獄

門、

63 一博奕宿仕、剩自分留主之節、右呼使を（及）打擲候処、不訴出者ハ、死罪、

64 一右呼使を頭取打擲候者ハ、死罪、其外打擲候者ハ追

放、携（ツツハリ）候者ハ、田畑取上所払

65 一前方科有之、追放ニ成候已後、御構之場所（致）徘徊、

其上（由事）怪事於致ハ、一等重可申付者ニ候得共、博奕

之儀を依致訴人、如元追放、

右之通常々役人は心掛可申事也、

一 田畑永代売之事

一 売主、牢之上追放、本人死候時ハ、悴同罪、

一 買主過怠、本人死候時は、悴同罪、

但、買候田畑ハ、売主之御代官又ハ地頭え可取上之、

一 証人過怠、本人死候時は、子ニ構無之、

一 質ニ取候者は、為作取ニ、質置候者より年貢諸役努候得

ハ、永代同前之御仕置也、此事頼納売と云、

右之通、田畑永代之売買御停止之旨、寛政式（永）（十）年末三

月十一日被 仰出之、

二 質田地載許年數之事

一 質田地屋敷并山林等、拾ヶ年<sup>ハ</sup>五ヶ年迄年季ニ候ハ、年季五ヶ年迄之内訴出分ハ可致載許、式ヶ年三ヶ年之年季ニ候ハ、年季明三ヶ年之内訴出候ハ、可致裁許候、右年數過候得は取上ヶ間鋪事、

一 質地年季ハ、弥拾ヶ年を限り、其余之永キ年季ハ取上間敷事、

但、質地証文ニ名主加判無之分ハ、取上ヶ間鋪候、置主名主ニ候ハ、相名主敷又は与頭年寄加判無之候ハ、取上申間敷事、

一 証文ニ年季之限り無之、金子有合次第可請返旨之質地ハ、其証文之年号より拾ヶ年之内ニ訴出候ハ、可致裁許、拾ヶ年過候ハ、取上申間敷事、

右は質田地年季明候て請返度旨、并年季之限り無之、金子有合次第可請返之由、証文を以訴出候ハ、只今迄ハ、年數を不極候故、載許まちくニ付、享保三戌年八月十一日 評定所一座評議之上、書面之通相極候、

出 座

酒井修理大夫

坪内能登守

牧野因幡守

中山出雲守

松平<sup>(冠)</sup>但馬守

大岡越前守

土井伊予守

水野讃岐守

水野伊勢守

伊勢伊勢守

杉岡弥太郎

辻六郎左衛門

三 質田地載許之事

一 惣て百姓質地、年季明候以後、金子濟方相滞候儀訴出候得ハ、唯今迄は金子<sup>(高)</sup>ハ五六十日或は七八十日限申付候て、忝度之日限ニ不相濟候得は流地ニ申付、日延ニハ不申付候、是ハ江戸町方ニて質入屋敷之取扱之格ニ准シ、日延ニハ不為致候、然共、地主之儀如斯申付候得ハ、分限宜者は質流之田地大分取集メ、又ハ田地連ン々町人等之手ニ入候様ニ成候、田地永代売御制禁ニて候処、自ラ百姓田地離レ候事ハ、永代売同前ニ候条、自今は質地一切流地ニ致不成様、只今迄質入ニ致置候分、又ハ当然訴出候て出入ニ成候分共ニ、質年季明候ハ手形為仕直、小作年貢ニても前方極置候分ハ忝割半之利積り之外ハ、金子致損耗、只今迄質地之小作年貢滞有之ハ、忝割半之利

金積りを以元金之内え加え、其後ハ無利（之濟地）金之積、金高尙割半賦年々返済之定ニ手形申付、元金切次第幾年過申候ても、地主え相返候様可致候、未夕年季掛り有之候分共ニ訴出候得ハ、是亦向後右之通、利金尙割半之積リニ改て、手形為仕直可申事、

一 質地載許之格法、前条之通此度相改候ニ付、五ヶ年以前酉年以來限の質地訴出候分ハ、只今迄之裁許を以流地に成来り候分ニても、当然元金不残差出、田畑請返度と願出候者ニハ為請戻可申候、但、流地持候ものゝ方にて、田畑配分致置候賦、又ハ年季質地等（二）も致置候分ハ、致其儘ニ、為請戻申間敷候、流地取候者え手前ニ田地有之分計り、右之通為請戻候様ニ可申付事、

一 自今ハ質地手形、庄屋与頭等其所の田地ニ直段式割之積りを以、手形庄屋与頭等加印可為致候、質（地）地主（二）直小作為致候といへとも、向後は小作年貢尙割半の積を以、（小作入上ケ可相極候、是より高利ニ不可致候、尙割半より利安ニ）貸出し（借シ借）いたし候儀は、可為相对次第事、

享保六年丑十二月

右は丑十二月九日、河内守殿御渡、私領方えも御触有之筈に候得共、此外ニも触知セ可申事有之間、其席ニても御触可被成筈ニ候、先御代官えハ相触候様被 仰付、御代官中えハ早速相触候、

#### 四 右質地之出入取上可申年数之事

一 質地出入訴出候儀、取上之候儀五ヶ年已前戌年、評定所一座（評議）之上、相極候年数之通りを以、可致載許之事、

右は、寅正月廿一日、評定所一座評議にて定、

#### 五

一 去々冬中相触候質地類、流地ニ不成様載許有之候処、右之通りニても、質地請返候事も成兼、至て迷惑致候者有之、金銀の借貸しも手支候由、当卯九月乙丑年以前之通、取捌有之筈ニ候事、

一金銀不残返弁、質地をも不相渡、及出入候時ハ可訴出儀勿論ニ候得共、年久敷儀ハ取上ケ無之候間、享保元年以前之出入は訴出間敷事、

一 丑年以來卯八月中迄、奉行所又ハ私領ニても質地年賦ニ請戻シ候載判申付、証文改直シ候分、弥其通可得相心候、然レ共、相對を以質地ニ致候共勝手次第之事、右之趣可相守、

享保八卯八月

伺書其外留書之写

三 奉行内寄合取計評議

附、留役吟味之仕様

## 六 覚

一 近年金銀之出入多有之、御用之支ニも罷成候間、拾八ヶ年以前丑年之通、去巳年迄之金銀出入は、取上ケ無之、相對ヲ以埒明候様申渡、当年正月よりの分可致載許候、尤借金買掛り売物の前金、諸職人作料手間賃等、惣て相對之筋ニて、金銀出入は同前之事、  
 一方々負方有之者、身上潰シ分散願之儀、向後借主同心不仕有之候もの、借金又ハ訴出候様可被申付候事、  
 一 只今迄ハ借金又ハ利米之分ハ無取上、預金も有之候得

ハ、被致載許候得共、畢竟内証ハ同前事ニ候間、向後ハ一樣ニ可被申付候、

一 奉公人又ハ引負取逃仕候もの、請人方より給金ハ急度返済為致、其外引負取逃之弁金分限有次第為弁、不足分ハ主人損金ニ為致、欠落仕候ハ、請人尋出シ候様可被申付候、右不屈者死罪又ハ流罪ニも可被申付候事、

一 欠落取逃引負仕候もの、唯今迄ハ其品ニより、当分牢舎又ハ手鎖被申付、金銀の滞相済候得は指免候、向後ハ品ニより遠島可申付候、大分取逃引負仕候ハ、死罪ニも可被申付候事、

一 跡式出入訴出候節、悪心を以偽之筋ニ候ハ、品ニより跡式相続不申付、家屋敷家財等ハ取上ケ可被申候事、

一 神社仏閣修造金之事、

一 出家出世金、座頭官金等之事、

右式ヶ条、向後ハ年月の無權可有載許事、

一 在々の者、公事訴訟其外江戸え罷出候節、百姓宿仕候もの、永々為致逗留、金銀費候様仕候、向後百姓宿仕候者、久々逗留為致候ハ、大屋又ハ名主方より吟味仕候様可被申付候事、

一 公事訴訟をすゝめ、目安を認め巧成儀を致、諸事出入之儀を取持、礼金を取りとなみに仕候者、常々吟味をとげ、町三不指置候様可被申付候事、

一 難立訴訟公事ニ、遠国のものを目安裏判并指紙を以呼集メ候ハ、訴出候者過怠牢舎又ハ過料為出候様可被申付候事、

一 輕奉公人町人百姓等口論又ハ酒狂候者、只今迄ハ当分牢舎之上追払ニ申付候、無宿盜人ニも可成候間、向後ハ品ニカ遠島ニも可申付事、

以上

元禄十五年閏八月

七

一 公事引負金銀之事

一 拝借金之事

一 為替金之事

一 当座雇日傭、職人日手間賃之事(同)

一 家質金銀之事

一 田畑質金銀之事

右之分は、前々之通年月無構載許可有之事、如斯評定御一座にて御書付出候間、写之遣候、在々迄被相触候にてハ無之候、各為心得申遣候間、可被得其意候、以上、

閏八月十八日

荻原近江守

戸川備前守

久貝因幡守

井上对馬守

八 覚

一 田畑屋敷質物ニ入、年季を限り年季明請返候等相定、不請返候ハ、先にて致手作候共又ハ外え質入ニ候共、構無之由証文、

御附紙

此田地屋敷、年季限り質物ニ入置、年季明候節不請返候ハ、先にて手作致候共又ハ外え質物ニ入候共書載(ママ)候手形之事、質地流候証又障無之、年季明不請返候ハ、無構、双方相对を以相定置候上ハ、只今ニ至り可請返旨申段難立候条、手形文言之通、質ニ取候者心次

第可申付事、

一年季明ニ不請返候上は田地渡候間、脇え何程之質物ニ入候とも構無之由之証文、且又年季明請返候儀不罷成田地渡候間、永ク構無之由之証文ニテ、別紙之証文入候儀有之候、

御附紙

田地質物ニ入置、年季明候節不請返候ハ、田地流候旨書載候手形、并年季明請返候事不成田畑流候条、永ク構無之旨文言ニテ別紙証文有之分、兩様共ニ相對之上ハ、只今可請返いわれ無之条、右兩様共ニ不及其沙汰事、

一先証文本金高方多ク外え質入候共、其金子を以先方可請返由証文、御附紙

田畑質ニ入、先ニテ可取前之金高方多ク再質ニ入候ハ、其金高を以先方可請取由書加え候手形之事、相對を以相定申候上ハ、手形文言之通再質金高を以可請返旨可被申付事、

一年季明不請返候ハ、流候間、重て檢地入候ハ、名ニ付候由之証文、

御附紙

質田畑年季明不請返候ハ、流候間、檢地之節、先の名を水帳ニ付可申旨書入手形之事、前条年季明不請返候ハ、流候旨書載候手形と同然之条、可被得其意候事、

一年季明ニ本金ニテ可請返、其節請返不申、年季明キ候以後受返候ハ、本金ニ利足を加可請返由之証文、并年季明キ候已後不請返候ハ、田地流候間、先ニテ如何様ニ致候共構無之由、流置重て質候ハ、本金利足加え可請返由之証文、

御附紙

此質物手形三品共、相對を以相定候上ハ、手形之通ニテ田地相返候様ニ可申付候事、

一田地屋敷年季無之質物ニ相渡、金子有合次第可請返之証文、

御附紙

田畑屋敷年季定無之質物ニ入、金子有合次第可請返由之文言手形之事、何年過候共可請返旨訴出候ハ、手形之通年數無之請返候様可被申付候、若時代久敷候歟、又は不分明之事情ハ、其節可被相伺候事、

一 田畑屋敷質物ニ入候を、此度本金相済シ可請返由申之、相手ハ田畑質ニ取候ニ紛無之候得共、本証文致紛失候由申之、右質物ニ入候年季并金高共不分明成儀も有之候、

御附紙

田畑屋敷質ニ入置手形、先ニて令分失及争論候ハ、詮義之趣、書付を以可被相伺候事、

一 質物田地証文ニ其所之田地高相応之金高金直成証文有之、質ニ入候者ハ位金之由申シ、相手ハ金高紛無之由申之、所之ものえ相尋候得ハ、所直段より高直之由申之、外ニ位金証拠無之候、

御附紙

位金ニて田畑質物ニ入置候由申之、外え被逐吟味候処、其所之田地ニ不応之金高多相見え候得共、証拠無之候、位金証拠無之候ハ、手形金之通可申付候事、

一 縦ハ田地拾両之質ニ取、年季明本地主え不請返候ニ付、又外え或は式拾両三拾両之質物ニ相渡、年久敷相過候を、此度本地主、先証文之金子ニて可請返由申之、最前質ニ取者、金子相違ニて致難儀候者も有之候、

御附紙

田畑質ニ取置、年季明ニ不請返候ニ付、最前之金高より多ク他え再質ニ入置候処、此度先地主最前之金高ニて可請返旨訴候事、最前之証文他え質ニ入候共無構旨於不書載ニハ、再質ニ入候者不念ニ候間、証文過分ニ候共、定之通請取之、先他え最初之手形金高ニて可請取、最初之証文ニ不請返候ハ、他え質入ニ候共無構之旨書入、但、年季明年数久敷候ハ、可為前条之通、難申付事も有之候ハ、此類其時ニ至り可被相伺候事、

一 田畑屋敷質物ニ入、年季明本金ニて可請返由之証文相定候迄ニて、何之訳も無之証文、

田畑屋敷質ニ入置、年季明可請返旨之文言ニて、何之定も無之、願出次第可請返事、然共、年季明年久敷候ハ、其時ニ至可被相伺候事、

一 田地讓渡証文ニて年季も無之、田地讓渡或ハ礼金為祝金ト金子取之、子々孫々迄構無之之文言ニて、由緒有之者又ハ由緒無之者えも、右之通讓証文致遣候も有之候、

御附紙

田地讓渡之証文ニて礼金等為祝金ト金子取之、子々孫々迄構無之旨之証文手形之事、讓渡シ之由ニ候得

ハ、金子取之上ハ永代売ト相決候条、田地取上、双方永代売作法之通可申付候事、勿論由緒有之も可為同前之事、

一質物田地請返候儀、子孫之外近キ親類願出候も有之候、御附紙

質田地請返候事、子孫之外遠親類願出候分ハ、不及沙汰事、

右之通奉伺候、以上、

元禄八亥六月

伊奈半重郎印

御勘定所

元禄七戌年御極

九 田畑永代売之者之事

一 田畑永代売之百姓ハ、牢舎之上御追放、若売候もの相果、其子牢舎之上追放、惣て男子は不残追放、女子家財之分ハ御構無之、買主も代金致損、田畑ハ被召上、三十日牢舎、日数過、所え返入、

右証人ハ牢舎之日数三十日経候て出牢、已後御構無之、当人相果候ても子ニ御構無之、

是ハ元禄七戌年四月六日、下総国高郡村同国沢賀山村出入之節相極、

一 寺社境内、新地古跡之訳、寛永十八巳年迄は古跡也、寛永十九午年カ以来ハ、新地也、是御太法ニ候、

十 評定所面々え被 仰出候御書附

一 寛永以後、御代々被 仰出候評定所法式、評定衆卯ノ半刻より会合候て申ノ刻退出シ、其日難決事候得ハ翌日会合候て、猶又難及決断事は老中え言上可申由ニ候、近年以来ハ公事訴訟も数多ク成来り候処、評定之面々事ニ馴、巧を構、載断之次第無滞処も候歟、会合の間なくも退出候様ニ相聞え候、若毎年任其大法ニ、其道理を及是ニため載断ニ至り候ハ、尤以不可然事ニ被 思召候事、一 評定所并於諸奉行所ニ沙汰之次第、專其証拠として道理之有前所をハ推尋す、其外之旨を捨テ、枝葉之事をハ穿鑿シ候由ニ風聞ニ候、如証状之もの、其拠と可致事勿論ニ候といへ共、公儀之証ニも可引用物ニ大法ニ背候事ハしるさしむべからづ、又事の未成所ニ付て、其本意を可知事勿論ニ候といへ共、枝葉の事を論じて多事にはたら

ハ、其本旨を失ふ事可有、然は必其証をも抛としがたき<sup>(3)</sup>、其末を逐ひ難シ、就中論地等之事、古来多クは評定所にて詮議之上を以事を決シ候処、近年之例、御代官ニ申付、檢使を以載断して故ニ、不可仕事とも有之由相聞え候、都て是等之類、諸事ニ付て其心得可有事ニ被思召候事、

一 附り、近年罪惡極重之輩助置、目明ニ口問杯と名所候<sup>(付)</sup>て、若罪のうたかわしき者出来候時ハ、奉行中彼輩ニ申付、或はさぐり求メ、或は糺明せしめ、事の実否罪の有無を決断有之由ニ候、縦彼輩の申処、其事を不誤候共、奉行面々此等の輩の力をかり用候て(天下の御政事を)取沙汰候半之事、甚以不可然候、況又彼輩の申処、或は遺恨ニより(或は賄賂ニよつて)事の舛引違、理を非と成ル類、種々風聞ニ候、宜早ク彼輩の本罪を糺シ、自今以後是等の類不可然事共停廃可有之事

ニ被 思召候事、

一 評定所之法、(公事)訴訟之事、其筋之役人難問有之候て、一座之面々存寄も候得は、存寄之処を不殘可申出ス由ニ候所、近年以来詮議ニも不及、最初申出候輩之任沙

汰、事を決候様ニ相聞候、若其事実ニ有之候ハ、評定の面々其人數多クといへ共、耆人之沙汰ニ事決候時は、古へ僉儀と申、評定と申事ハ其本儀を相失候、自今以後ハ各心力を尽シ、僉議之上ニ評定致候様被 思召候事、

一 評定所之法、遠国より訴来り候輩、其逗留之日久シからず候様可有由ニ候、然ニ近年以来ハ、評定所并諸奉行所ニおゐて公事訴訟難相決、年月を経て逗留之輩有之由相聞え候、輕賤之者ハ、其家業を抛て<sup>ナケウツ</sup>其在所を離レ、逗留之日久敷候てハ、たとい其本意のことく事濟候ても、其費用之失不可少かる、況其申処難叶於者ニハ尚々可及迷惑ニ、尤以費の事ニ候、自今以後は奉行之面々、此等之処をおもひめくらし、沙汰之次第可有由ニ被 思召候事、

附、老中え申達言上之事ニハ、再三思慮をも用候故歟、毎年遲滞の事も有之、御尋之旨有之時は、若申処不相替事も有之候、都て事の無滞申処明分かなり心得可有之事ニ被 思召候事、

一 凡公事訴訟之事、或ハ権勢之処縁有之輩、或ハ賄賂を

(行<sup>ひ</sup>)用<sup>え</sup>候輩の類ハ、其志を得候て其旨<sup>望</sup>を違候者共有之由、世上申沙汰候処、既二年久敷候を以、御代始之御条目ニ印シ被下候といへとも、其旧弊今に不相改候由、

尚々其聞え候、若風聞の如クニ候ニおゐてハ、御改の事ニよりてやぶれ候処ニ候得ハ、此上ハ其御沙汰ニ不被及事ニ候、奉行の面々、其家中の輩ハ云ニ不及、支配の者共ニ至ル迄よろしく其いましめ可有之事ニ被 思召候事、

附り、牢屋の役人といへ共、種々の私法を立、牢舎の輩より賄賂貪ニ候次第等相聞え候、此等之事共、奉行中ハ未タ承り伝<sup>す</sup>候故、(制禁ニハ不及候歟、尤以

一右之条々、宜承知可令候、奉行所之事共におひかへば、

天下の御政事之出る所々<sup>(マヤ)</sup>に候上は、(万事の)理非は此処ニ相定ル事共<sup>(候)</sup>にて、如只今有之候ては、其奉行の越度と申計にてハ無之、則御政事の明らか不成して、人民の安からざる処にて候間、各心得を以沙汰の次第可有之由被

仰出者也、

正徳二辰九月

評定所一座

奉行中

遠国諸奉行所ニおゐて、都て此分ニ可准由被 仰出者也、

右は御黒書院溜り聞え評定所一座并御勘定吟味役被 召呼、御老中御烈座<sup>(列)</sup>にて被 仰出候、

辰九月五日

井出源左衛門読之

十一 追放之者軽重国々所々書付

重キ追放

関東八カ国 武蔵 相模 上野 下野  
安房 上総 下総 常陸

山城 摂津 境<sup>(堺)</sup> 奈良 長崎 東海道筋 木曾路筋 駿

河 尾張 伊勢

中追放

江戸拾里四方 京 大坂 境<sup>(堺)</sup> 奈良 伏見 長崎 東海

道筋 木曾路筋 日光 日光海道筋<sup>(街)</sup> 名古屋 和歌山

水戸

軽キ追放

江戸拾里四方 京 大坂 東海道筋 日光 日光海道<sup>(街)</sup>

江戸追放 江戸拾里四方

右は正徳三巳年八月廿四日出候 御書付、

十二 評定所一座可被相心得条々

一 公事訴訟人、遠国より罷越候者は不及申、当所者も裁断及遲滞候ては、本人ともの外其所の輩迄えも内外の物入も日を逐テ多く、是ニ付ては内縁秘計を廻シ、其事を取持候物<sup>(マ)</sup>杯も出来、種々不宜沙汰も有之候、又候此等の物入をいとひ候者共ハ、自ラ公事訴訟も難成道理有之者も非道の事ニ押からめられ、迷惑致候者も可有之候、都て如斯之事ハ、為御仕置に甚だ不可然候、然れとも其事ニよりて理非うたかわしく、又は一座の評議もまちくニて事難決、載断延引シ候事も有之べく候、自今以後ハ公事訴訟等百日ニ過候ハ、難決儀は其事の始末明ニ書記、何れも存慮の処をば二筋ニも三筋ニも付札ニ書印シ可指出候事、

一 評定所え召出候借金ハ、公事人年々ニ其数多ク候故、此外の公事訴訟詮議せられ候為<sup>(に)</sup>、事の妨ニ成来、自今以後ハ或<sup>(式日三)</sup>八日之内ニて一日、立会三日之内ニて一日、

凡一月ニ二日充、借金公事人計り日を相定、其餘ハ此外之公事訴訟人等召出、理非分明ニ詮議之上、裁断ニ可被及候事、

一 諸奉行所ハ牢ニ入置候者之事、只今迄ハ指て事不六ヶ敷、五年も拾年も事を不決候故、牢内ニて死候者も年々多く、又ハ火事等之時逃候ものも有之、其本罪ハ輕候共、大犯之罪ニ入候ものも出来、又ハ相手も有之、同類も有之候事ニ、其相手同類等死失候て、或は詮議の手掛りなくして事難決、或は存生之者計り相当之刑罪ニ行れ候てハ片落成事ニ似より候事も出来、都て此等之類ハ御仕置ニ甚だ不可然事ニ候、自今以後ハ牢ニ入置百日過候ても決<sup>(難)</sup>候事をば、是又其事終末分明ニ書記、何も存寄之処、式筋ニも三筋ニも附札ニ記可被差出候、

附、古来ハ牢舎又ハ過怠牢杯と申、其罪科を決断シ牢え入候事ハ、御仕置の一通りニ成候処、近年ハ其罪科未タ不決候ニ、詮議之間先牢え入置候者<sup>(求)</sup>は多く成来候歟、是又不可然事に候、人をも殺害盜賊等の罪犯有之ハ、又ハ其身を可預ケ置所も無之者、又本主人ニ預ケ置候ても不可然子細の有之者の類ハ、詮議之間牢えも

入置候事も有之候、此外ニ可預置所も有之者を、其罪科いまだ不決候内ニ先牢え入置候事、宜可有思慮候事、

右之条々、評定所奉行所之事ハ天下の理非相定候所にて、其上又世の人の安堵し候も迷惑し候も、公事訴訟之裁断ニ相掛り候、縦一旦ハ其時之奉行の沙汰ニ候故、理を以非とせられ、非を以も理とせられ候共、違背ニは不及といへとも、年月を経候後ニ至り其事破レ候ては、最初裁断之節、一座の衆中の為ニ不可然事ニ候、都て此等之理非は申に不及といへとも、御仕置之為ニ<sup>(大)</sup>太切の(御)事<sup>(候を)</sup>ニおゐて以相達候間、能々其旨可被相心得候事、

正徳六年申四月

右之通、御書付出候間写置之候、御代官所えは被触候ニ不及候、在府無之面々留守居は披見從留、下野守方え可被相返候、以上、

四月十日

大久保下野守

伊勢伊勢守

水野伯耆守

水野因幡守

十三 覚

一 追放百姓之家屋敷・諸道具共、向後ハ關所ニ成候筈、西ノ五月十日、松平对馬守殿・中山出雲守殿・水野因幡守殿御相談之上、因幡守殿え被 仰付候事、

一 追放相成候百姓之家財道具ハ、御構無之事、

享保貳年西五月十日

右之通相極候間、向後其心得可有之候事、

六月廿九日

木村四郎兵衛

鈴木弥惣右衛門

吉田左兵衛

小出嘉兵衛

正木藤右衛門

是ハ上方御代官衆え御触如斯、

関東御代官衆えは御触無之、

十四

一 質田畑屋敷并山林等、拾ヶ年方五ヶ年迄の年季ニ候ハ、年(季)明キ五ヶ年之内ニ候ハ、訴出候分ハ可致載許、貳年三年之年季ニ候ハ、年季明三年之内訴出候

分可致載許、向後右年數過候ハ、取上ケ申間敷事、

一証文年季之限無之、金子有合次第可請返旨有之質地ハ、

其証文之年号より拾ケ年之内訴出候ハ、可致載許候、

拾ケ年過候ハ、取上間敷事、

一質地年季弥拾ケ年を限、其餘の長年季ハ、取上ケ申間敷

事、

附り、質地証文ニ名主加判無之分ハ、取上申間敷候、

置主名主ニて候ハ、相名主与頭年寄加判無之ハ、是

又取上ケ申間敷事、

一質地年季明候て請返度旨、并年季限り無之、金子有次

第可請返由之証文を以訴出候者、唯今迄年数を不極候

故、載許まちくニ付、享保三戌八月十一日、評定所一

座評議之上、書面之通相定候、以上、

戌八月

酒井修理大夫

牧野因幡守

松平対馬守

土井伊予守

坪内能登守

中山出雲守

大岡越前守

水野讚岐守

伊勢伊勢守

大久保下野守

杉岡弥太郎

辻六郎左衛門

十五

惣て百姓質地、年季明以後、金子濟方相滞候儀訴出候

得共、只今迄ハ金高ニより六十日八十日の日切申付候

て、一度之日切ニ不相濟候得は、質地ニ申付、日延ニハ

不申付候、是ハ江戸町方ニて質入屋敷の（取扱之）格ニ相

准シ、日延に不為致候、然共、地方之儀如斯申付候得

ハ、分限宜物ハ質流の田地大分取集メ、又ハ（田地）連々

町人の手ニ入候様ニ成候、田地永代売御制禁ニて候処、

自ラ百姓田地ニ離レ候事、永代売同前之儀ニ候条、自今

ハ質地一切流地ニ不成様、准シ今迄質入ニ致置候分、

又ハ当然訴出候て出入ニ成候分ともに、質年季明ケ候得

ハ手形仕置、小作年貢ニも前方極置候分ハ、壹割半之利

ニ積り、其外ハ金主之損金ニ致候、只今迄質地之小作年貢滞有之ハ、壹割半之利金積りを以元金之内え加入、其後ハ無利之済崩シ之積り、金子壹割半充年々返済定ニ手形申付、元金切次第幾年過候ても地主え相返候様可致候、未夕年季掛り有之分共訴出候ハ、是又向後右之通利分壹割半の積り改之、手形為仕直可申事、

一質地裁断、格法前条之通、此度相改候ニ付、五ヶ年以前酉年已来限り訴出候分、只今迄ハ載許を以流地ニ成來り候分ニても、当然元金不残差出シ田地請戻シ度旨願出候者にハ、請戻させ可申候、但流地持主方にて(田地)配分致置、又ハ年季売質地等ニも致置候分ハ、其儘ニ致為請戻申間敷候、流地取候者の(手前に)田地有之分計り、右之通為請戻候様可申付候、

一自今ハ質地を以金子借候事、其所之田地直段ニ式割引之積りを以、手形ニ名主(庄屋)与頭等加判為仕候、質地地主ニ直小作為致といふとも、向後ハ小作之年貢壹割(半)之(利)積りを以、小作入上ケ可相極之、是より高利ニ不可致候、壹割半より利安ニ貸借り致候儀は可為相対次第事、

右之通堅可相守候、若相違之輩あらば可為曲事者也、  
享保六五年十二月  
右質地之儀、書面之通相極候間、向後此趣ニ可被申付候、井上河内守殿え相伺如斯候、以上、

十二月

辻六郎左衛門

杉岡弥太郎

萩原源左衛門

駒木根肥後守

寛因(播磨)幡守

大久保下野守

水野伯耆守

享保七寅年正月

十六 質地之儀ニ付覚

一質地年季ハ前々拾ヶ年限之候御太法(太)ニ候、拾ヶ年質地年季明可訴出處、段々申渡候て五ヶ年過候て質入致候年より拾五ヶ年目ニ訴出候共、取上ケ裁許有之筈ニ候、五ヶ年の年季明候て五ヶ年過候ても、右拾ヶ年の年季明ケニ相准シ候、式年三年の年季ニ候ハ、明候て三年之内訴

出候ハ、可及載許候、是ハ年季明ケ候得ハ、質流地ニ不相極、流証文も無之年季明候て延々ニ成来り候質地之事ニ候、

一質地年季、右之通ニ候処、式拾ケ年も三拾ケ年も過候質地を請戻度旨願出ルも有之由ニ候得共、如此年久敷質地ハ、一切取上ケなき事ニ候、

一質地年季之定無之、金子有次第又は儲次第可請返杯と有之質地ハ、証文之年号ヲ訴出候年迄拾ケ年之内ニ候ハ、可及裁断候、拾ケ年過候得ハ不及沙汰候、如斯之質地ハ、地主方に小作不致候故、金主方え田地請取置、手形不致之、外之者に式割三割ニも小作為致置候ニ付、地主方より訴出、右質入之時之元金ハ、壹ケ年壹割充之積り済崩ニ可仕候間、此度礼金と名付金子取候て、讓請候分ハ質地ニひとし、讓請ニハ不相立候、其年数拾ケ年季質地之積りニ取捌、讓りニ不成候、右金子為相済可請戻候事、

一惣て質地証文、請人之外ニ名主与頭加判無之ハ取上ケ不及裁断候、名主加判も無之候得ハ、名主肩書ニ請人名主と有之候て、請人ニ立候判ニて外ニ加判人無之候得ハ、

名主役目之判ニて無之証人判ニて候故、無御取上候、若名主田地ニ候ハ、相名主組頭之加判無之候得ハ無取上候、相名主無之村ハ、与頭加判無之ハ無取上ケ候事、

一六ケ年以前享保式酉年以来、質流ニ成、縦於評定所ニ裁許済候流地たりといふ共、訴出候ハ、取上之、元金当分不残差出候ハ、為請戻可申候、元金不残出候儀難成旨申候得ハ、返済願出候ハ、取上ケ無之事、

一質地年季之内滞候小作年貢、又ハ利金之儀訴出候得共、滞之小作米金ニても、壹割半之利分之積り改直、其米金高二応シ済方申付候て、年季明次第元金済之質地請返候様証文直之、但米方と訴出候時ハ、御張紙直段を以、金ニ積り候て壹割半当テ候様申付候事、

一年季明候て後ニ、年季之内ニ小作金利金等滞之儀訴出候ハ、滞候分ハ前方米割之利ニ仕置候証文ニても壹割半充ニ改勘定、元金之内え加入、金高二結候て、金高を壹ケ年ニ壹割半充之積を以済崩、証文改直シ候、壹ケ年ニ付壹割半充済崩致勘定候得ハ、何れも七年賦ニ当り候、但シ七年目ニハ壹割半ノ金積り方ハ少ク当り候得共、壹割半充六年ニ済、七年目ニハ金高残り程之員数を済シ元

金濟切候て、其上質地を請戻シ候筈ニ証文認直シ可申事、

一 質地於地主ニ直ニ為作候小作証文、若小作利金之極様一割極置候て、壹割半ニテ無之候共、前方約束之通可致置ト申候ハ、相對次第之事ニ候、壹割半ニ改直度と願候ハ、御定之通壹割半ニ証文改直シ可申候、是を心得違ニテ壹割ニ極候を壹割半ニ直シ候得ハ、質地不足ニテ候間、質地を増候て可取旨申、又ハ年季を延シ可申抔と申事有之由、無筋之事ニ候、最初賃入相對次第之儀ニテ、質地於増ニ年季を延候様成儀、可有筋ニ無之事、

一 賃入ニ致候て田地主ニ直ニ小作為請置候分ハ、質地証文之外格別ニ小作証文致、証人判無之証文請取置候得共、別人え小作為請候同意ニテ候間、田地主之無構別人同前之載許ニ候、若田地主小作申付候ても、小作証文別極ニ不取置、質地証文計取置候て、質地ハ其儘地主作り罷在候ハ、質地之法ニ無之、借金書入之田地之筋ニ候ニ付、自由借金之格ニ准シ相對次第可仕旨申渡候て、質地之取捌ニ不及候、右之類を実々質地と同事ニ相心得違候輩有之候、質地証文ニ小作証文兩様無之候得ハ、直ニ地主

為作置、質地証文計り有之分ハ、書入田地と申筈ニ取上ケ無之事、

一 質地証文年季明候ハ、直ニ流地ニ可致候間、苗田ニ可被致候と書入候といふ共、是又是ハ流地之筋ニは不成候、流地之別ニ流地ニ致ス証文、人前名主与頭之加判ニテ可有之候、左なくては流地ニは無之候、質地之最初之証文ハ、右流地之仕直シ証文引替之分ハ流地ニ極候、無左候てハ流地之極無之事、

一 小作米金不殘ハ、不濟候て内濟致置、殘分未タ不濟分ハ、一割半之勘定を以、濟候分ハ引次候ても壹割半之内え入候て差引可申付候事、

一 賃入候田地之儀、其所ニテ田地売買之直段之代金積りより式割引之積りニテ賃入候筈相極候、是ハ享保六丑冬、質田地御制法改候以後之質地之格式ニテ、丑年已前賃入置分ハ、其時之相對之儀ニ候故、其通ニテ差置筈ニ候事、

一 質地ニ入置候元金不濟内ハ、金主より田地不相返法ニテ候故、地主直ニ小作請有之候ても、元金濟切候迄ハ、年季之内は年々小作金壹割半充、金主方え急度濟候様申

付、証文為致可申候、如斯之儀候処、悪敷心得、此度質地之格法改候已後ハ、元金不濟候共、質地ハ請戻置候て、元金共ニ致都合、壹ヶ年壹割半充年賦ニ濟候筈と心得候も有之、又は質地を直ニ地主方ニ小作ニ請候ものハ、小作ハ不出筈と心得も有之由、是ハ甚だ心得違ニて候、元金ハいふニ不及、小作滞候分も不濟候てハ、質地金共不相返法ニ候、但、年季明ヶ候得ハ、小作金ニても利金ニても不出之、元金計壹割半充年賦致濟崩ニ、元金不殘切次第、不殘地主え相戻候様申付候事、

一質地之小作年貢、又ハ利金前方式割三割ニ格候て、数年相濟候分、此度の御触ニよつて、壹割半より多分ハ元金ニ引次、田地請戻シ候筈之様ニ心得違候て、相願候輩も有之由、是ハ無筋心得違ニて候、前方事濟候分ハ、如何程之利分之格ニても相對之事ニて候間、濟候て遣去候分ハ其通り之儀ニ候、享保丑冬方以後之質地ハ、小作米金ニても壹割之積リニ相極申候事、  
一質地金主方え受取置、地主直ニ小作ニ不為仕、他之者ニ小作為致、年季之内ハ御年貢も金主より納之年季明候て、金子返濟田地請戻シ候定ニて、作徳米金式割当候も

有之、又ハ未夕年季二三ヶ年も五六ヶ年も懸り候て、此度御定之趣ニ証文仕直シ候ハ、最前格候作徳式割ニ当り候ハ、証文仕直シ候上ハ壹割半の利積りを以、元金ニ加入候ニおゐてハ、縦ハ田地を三反歩質入ニ置候田地を、式反歩ニへらして無利之濟崩壹割半ニ合候勘定ニ証文直シ度旨申類も有之由、是ハ心得違ニて候、右地主小作不為致、米金式割ニも三割ニも当り候共、如此の類ハ、前方之相對ニて質流ニ渡置候故、年季明ヶ候分、元金壹割半充濟崩次第、質地請戻シ候筈之前条に段々有之通、年季明ヶ候質地、前方年季之内滞候小作金利金分ハ、此度壹割半ニ改之、元金え加入、金高ニ■壹ヶ年壹割半充致濟崩ニ、濟切次第田地請返シ候筈也、未夕年季掛り有之小作利金滞有之分、滞候小作金利金計、壹割半之積リ改メ証文申付、金高ニ応シ式三ヶ月又ハ五七月、其餘も其金高ニ又ハ其地主之身躰之分限吟味之上、相応ニ急度濟候様申付候筈、年季之内之小作金利金ハ元金え不加入、金高ニ■候事ニてハ無之、別段ニ為相濟候様、右之通也、扱又元金は定之年季明不殘返濟之上、田地は地主方え請為戻候事、

一質地入置候者、たとへハ田地耆町歩之質地にて年季を定、金貳拾両も借り候て、右之内五反分金主方え渡置、五反歩手前ニ残置候、五反歩ハ田地を以、右質地耆町歩之年貢諸役共に地主にて相勤候て、無年貢無役之積りニ手形取置候類も有之候、是ハ質地之手形にて致置候得共、畢竟此手形ハ御法度之頼納売にて、ケ様之出入訴出候ハ、頼納売買之御仕置ニ可成事ニ候、如斯質地証文、必名主与頭等之加判無之事にて、若名主等之加印候ハ、名主も御仕置可有之儀ニ候事、

一質地直ニ地主ニ為作候て、別人ニ小作為致候、同前小作証文別段に証人加判にて為仕置候て、年季明已後ニハ質地後一切小作利金不出之ニ付、金主訴出候時は、右滯之小作利金、前方何割の利ニ相極置候共、無坳今御定之耆割半ニ勘定致シ、元金之内え加入、金高ニ■候て耆ケ年一割半充年賦無利ニ済崩ニ申付、尤質地ハ金主方え為渡之、金子進退たるへき旨証文改直之法にて候処、心得違にて質地え金主方え相返申間敷旨申之、耆割半充ノ済崩ニ可仕旨申出候も有之を、御代官地頭杯も不存了簡ニ候て、地主申処尤之儀と存、最寄之御触書之趣如何様心得

違致シ決断、是を兎や角と評議仕候て、載許不埒も有之由、甚以心得違の儀候、右地主之申通、質地を金主方え不相渡、小作金も不出、質入田地を手前ニ置候得ハ、是ハ書入田地之相對借金之格ニ成、自不取上筋ニ成候儀、於載判人方品を新規ニ改直シ、小作証文を不用、不法之取捌ニ成候、其上第一ハ、御触書之趣ニ違背之儀、心得違ニ候条、急度名主与頭等立会、金主方より、地主方右之質地為引渡候て、金主之進退可為仕候、如斯明白之載許を惡敷心得、年季明候質地ハ無利済崩之御触書有之を以、質地を金主え相渡候得ハ、金主右之質地を他え小作ニ為仕候故、小作利金取候間、無利と申旨ニ違候杯と申談アタカも有之候得共、おろか成了簡ニ候、元來質地主ハ地主ニ小作為仕間敷事ニ候得共、金主え質地請取候ても、兎角外え小作ニ為仕候事ニ候間、作り来り候田地之儀ニ候故、地主直ニ小作ニ請取候ハ、別人ニ為作候心得にて、小作証文を以為作候様、以相對を直作ハ為仕候事故、小作も別人小作と同事ニ心得候載許之法にて候処、直小作ニたつて兎や角の評議ハ不埒之事ニ候、因茲金主え受取、外之者ニ小作為致利金取候共、手形致シ候共、勝手次第

之事ニ候、一度質ニ入置候質地ハ、金主不濟内ハ金主の心得次第可仕事ニて、地主方何之倉着ニ及間敷事ニ候を、裁判之面々心得違ニて、右之趣書入田地之筋に致候様成儀、不及沙汰ニ儀候事、

右之条々之趣を以、証文ニ為仕置可申候、若金子相滞候ハ、証人立会、急度可相濟之旨、証人ニ為書入申儀ニ候、則証文之案文別ニ有之候、以上、

十七 右質地評定所載許之趣問合候覺

一名主ニても組頭ニても、一判ニ候得は無取上事、

但、名主与頭ニもおとらざる長百姓外ニ加印有之候

得は、名主与頭一判ニても取上候事も有之候、

一添歩之事、御書付有之通り、半頼納て無取上老割半合候

添歩ニても同前、

附、頼納様之証文ニても、奉行衆え不申上、申含メ

相返シ候、

一拾ヶ年以来午ノ年方中三年ニ相定、酉ノ暮年季明候処、請不戻、只今申出候儀有之ハ無取上、

附、此筋書人之通り式ヶ年三ヶ年ハ、年季明三年五

年拾年は、明年之翌年より五ヶ年之内ニ訴出候ハ、老割半ニ証文申付、此外年過候ハ、無取上事、

一年季之内訴出候ハ、地主直小作ニ致置候得は、小作計老割半ニ証文仕直シ、本証文ハ致其通ニ置候、田地金主え請取置申分は無構、証文直シ候儀無之事、

一酉年以来流地ニ成候分、只今取戻度旨申出候得ハ、元金不残為相濟候様被 仰渡候事、

一直小作ニ致候処、元利相滞訴出候ハ、御書付之通、元金老割半之済崩シ申付候、但、田地も金主え相渡シ、地主ハ不構申付候事、

一滞添金之事、其地所を書入候て、金子え加入候慥成儀も無之ハ、元金ハ不入候事、

一小作米之事は、訴出時は御張紙直段引合、老割半ハ下直ニ当り候ハ、其通りニ致金高之当り候分計り金子ニ直シ候事、

一切歩添歩半頼納ニも無之、評定所ニてハ、証文不  
宜候、無取上ヶ■と申渡シ、頼納売と申ニてハ無之  
候、

一 百年以來之流地ハ、質地証文之外ニ流地証文有之、御書付之趣を以請戻度旨、地主訴出候分ハ、無取上旨申渡、

尤酉年以來之流地ニ限り申候事ニて候、小作の事ハ、本

証文不相互候ハ、相對次第ニ候、

一 壹割ニ極候処、双方ハ壹割半ニ願出候ハ、質地ハ前方

極置候通ニて抱置、利金計リ相増、元金え加入証文為致

置可申哉、

右之通りニ候、

一 貳割之処、直段評定所御吟味次第如何様之訳ニ御座候

や、質入候者ハ高直ニ申、質ニ取候者ハ下直ニ申■、ま

ち〱ニ罷成、外見合之直段無之候、

質ニ入候者之名主方上中下田畑売買直段口書取之、

貳割ニ致シ候事、

一 質地、金本え不相渡、地主小作扣候時之御定ニ候哉、

右之通り候、

一 御觸書以前、小作高利ニ成候も今以不相濟、此度願出候

分ハ、前方極之通可申付也、

御觸書以前ニても、壹割半ニ仕置直シ申候、

一 丑年以前致質入ニ、年季ハ今以懸高利ニ、質地丑冬まで

利金濟、地主小作ニ扣候、丑冬以後并今年より、壹割半之利金減シを手形致直度由願出候、如何被 仰付候哉、

壹割半ニ仕直し候、

一 質地、金主え請取、金主方ニて年季之内扣置候時之御定

書ニ候哉、

右之通りニ候、

一 質ニ取、年季之内質田畑金子請取置申分、貳三割四五割

ニも当り候処ニ、直段等吟味之上壹割半ニ合候積リ、今

年より田畑を減シ致証文替申度と願出候、此類金借候者

の高利之由申之、金主ハ高利之由無之旨申争候、縱何利

ニ当り候共、質地を金主え渡置候分ハ、願出候共無構差

置申候筋ニ候哉、

金主方ニて地所有之分、無構差置申候、

一 前方年季之内、貳三割之利金滞有之、此度申出候得は、

壹割半ニ改之、日限申付為相濟候哉、

金高ニ応シ日数ニ申付候、

一 利金小作金、別段ニ為相濟申候仕方之事、

一 質地証文ニ、名主たりといふ共名主と申肩書無之ハ、無

取上事、

一 右証文ニ名主証人と計ニテ、外ニ連印無之ハ無取上事、

右書面之通りニ候、

一 地主名主ニテ、組頭歟年寄加判有之ハ、取上御載許之事、

附、相名主又ハ与頭年寄之証文と有之、連印無之分ハ、

無取上、地主名主ニテ、与頭か年寄人計り加印有之、

役判ニても外ニ証人無之候、沓割の証文■無取上ケ、年

寄ニても与頭ニても沓人致役判、外ニ又証人相定メ之者

有之候得ハ、裁断有之候、然共、与頭式人も役判致し候

証文ハ、たとい証人の判外ニ無之共、裁断有之候、此類

ハ、新証文ニ証人立替の文言の処を、加判の者立替と認

メ遣し申候事、

一 惣て内済有之質地田畑出入ハ、訴出候元利高之内ニテ、

内済を引、残ル分ニ沓割半の利足を懸証文、

書面之通りニ候、

一 六年以前流置候質地、訴出候節、当分元金不残差出候

ハ、請返候様、自餘並之沓割半之済崩ニ不申付候、

此沓ケ条、当時如斯御載許有之候、左之通、

一 酉年已前之流地ニ候得ハ、当然訴出候ても為受戻不申定、

質地年季明或ハ其後ニても流証文無之ハ、裁許可申付候、

年季明候年数之構無之事、

一 拾ヶ年季之質地ハ、年季五ヶ年目ニ裁許有之、六年目も無

取上、五年季之質地ハ、年季明候て五年目迄ハ裁許有之、

式年三年之年季ハ明候て、年式三年之内訴出候得ハ裁許有

之、四年目より無取上、右之分ハ流証文無之、年季明延々

ニ成候質地受返度旨願出候分ハ、裁許の事ニて候、然ハ年

季明候年数之無構之と申事ハ無之義ニ御座候、 附り、有

合金之有之証文ハ、質入ニ致候年々拾年迄ノ内、訴出候得

ハ裁許有之、十一ヶ年目ニハ取上ケ無之事、

一 一年季明訴出候質地、年季之内計りの小作金滞は可申付

候、小作滞無之候ハ、尤元金を以為取戻候定ニ候、年

季明候以後ハ、小作金ハ不及沙汰事、

書面之通りニ候、

一 酉年以前ニても、流地証文不致置、年季分明ハ自餘并之

候ハ、一割半済崩ニ可申付候、年季懸り候小作計り滞候由訴出

候ハ、小作計沓割半之積りニて年賦無構ハ、小作滞計

済候文言書入無滞金ハ、元金之内え不加入、別断書付候

事、

右之附紙御引合御覽可被成、年季掛り小作之事ハ、如斯之御書付ニテ相濟申候、

一持田地、小作預々、小作米滞候由訴出候、此載許ハ右濟候小作米何割ニ当り候や、元金無之間難知候ニ付、右田地致質入候ても何程金子借候積り候や、双方の名主与頭え申渡シ、所並之田地代金吟味致、地代金元を式割引、元金え壹割半を掛、其分を老年之小作滞候ハ、暮を限り可濟旨、小作人え証文可申付候、小作滞米ニても、右之趣を以、小作金壹割半之積りを以、金子濟候筈ニ可申付事、

一質地金主方え請取、小作別人ニ為作、縦丑寅兩年小作滞有之処、丑年ハ質年季之内に有之ニ付、壹割半積り元金え加入、七ヶ年濟崩之積り手形仕置候、尤別人ニても小作人も加判為致候哉、

書面之通りニ候、

右寅の小作滞は、年季明候已後之小作金ニテ候得は不及沙汰、金主可為損失旨ニ御座候、右小作人より御年貢相納候積り、小作証文相極候分、金主之損失ニ申付候ては、右質地ニ會て由緒無之、別人の作り取ニ罷成、御年貢は金主弁

納仕候、ヶ様之類ハ如何被 仰付候哉、

地主直ニ致小作候ハ、勿論、縦別人え小作致来り候ても、年季明以後之小作滞ハ、金主損ニ罷成候、流証文有之分ハ、小作ハ名主之小作と同事ニ候、名田小作ハ壹割ニ無構、相对次第たるへき事、

十八 相渡申質物手形之事

一西御年貢相詰申ニ付、前野ニて下畑四反三畝拾五歩、縮野ニて下畑壹反七畝歩、明神様ニて下畑三反歩、合テ九反拾五歩質地ニ相渡、金子九兩御座候ハ、加判之者罷出、急度埒明可申事、

一御公儀様御年貢諸役入用等ハ、其元ニテ御勤可被成候、何時成共、右之金子不残致返進候ハ、右畑無相違御返可被成候、返進不致内ハ何年も其元ニテ御支配可被成候、依て質物手形如件、

年号月日

何村借主

名主 誰印

受人 誰印

請人与頭 誰印

誰 殿

借主名主にて与頭有之候得は、請人判ニ役目判にて無之

ニ付、取上ケ不申筋ニ存候、

書面之通りに候、

右小作地主請合加判人同断、

十九 小作手形之事

一 下畑九反拾五歩之内、神明様にて三反歩之処、地主方にて小作預り置、右九反拾五歩御年貢諸役入用等、畑主方にて年々相勤可申候、若滞候ハ、右之畑其方にて御支配可被成候、御年貢諸役手形仍如件、

年号月日

何村借主

名主 誰印

請人 誰印

与頭 誰印

誰 殿

右之通、地主直ニ小作致候故、別人之小作之心にて御年貢諸役之事、地主方可勤旨認め候と相見え候、然ニ依て本証文は、其筋小作証文ニは如斯認候も有之候、頼納分

ハ不相見候、別人小作と御覽可被成候、其上小作証文ニは拘り無之事と本証文第一と存候、

一 去々丑年冬中相触候質地之類、流地ニ不成裁許有之候処

ニ、右之通りニても質地請返シ候事も成兼、却て迷惑致候ものも有之、金銀の貸借も手支候由相聞候ニ付、当卯

九月より丑年以前之通取捌有之筈ニ候事、

一金銀弁納不致、質地をも不相渡、及出入候時ハ、不訴出儀勿論ニ候得共、年久敷儀は取上ケ無之候間、享保元申

年以前ハ、訴出申間敷候、

一 丑年以来当卯八月中迄、奉行所又ハ私領ニても、質地年

賦等請戻シ候裁許申付、証文改直候分は、弥其通ニ可得

相心候、然ハ此上相对を以質流ニ致候共、勝手次第事、

右、此旨を可相守もの也、

享保八年卯八月

評定所留役衆伺候趣

二十 寛

一 質地出入、丑年以前之通御取捌御座候ニ付、左之通奉伺

候、

一 申年以來之質地元金并小作金相滞訴出候節ハ、尤金高二  
 応シ日限証文被 仰付、其日限ニ不相濟候時ハ、直ニ流  
 地ニ被 仰付候と奉存候、

附リ、質地ハ年季限り有之、小作滞無之訴出候時ハ、小作  
 何割ニ当り候とも、前々双方定置候通り、証文通り之日限  
 可被 仰付と奉存候、

御附紙

一 質地、書面之通可相心得候事、

一直小作滞候ハ、金高二応シ日限長短申付、不相濟候

ハ、年季之内ニても質地は取上ケ、金主ニ可相渡候事、

一 別小作滞、是ハ金高二応シ日限長短申付、不相濟候

ハ、地面金主方ニ為相返、小作滞ハ身代限り可申付

事、

一 質地ニて無之名田、小作滞ハ右ニ准シ日限申付、不相濟

候ハ、地所ハ地主方ニ相返シ、小作人は身代かぎり可

申付事、

一 享保元申年以前之出入は、訴出問敷旨御書付御座候、此

儀ハ縦質地之証文ハ申年以前極置候ても、年季申年ニ懸

り候此等之分、本金小作共御裁許御座候や、但、申年以  
 来致質入候分計り之儀御座候哉、御附紙

未年迄ニて年季明候分、取上ケ無之候、申年ハ未年迄年季  
 掛り候分ハ、取上無之事、但、証文之年季ニ不構候事、

一 証文ニて名主加判無之ハ、前々方御取上ケ無之候、此儀  
 も自今共ニ御取上無之筋奉存候、但、丑年以前之通り御  
 取捌有之筋之由、御書付御座候、然ハ享保三戌八月十一  
 日、御一座御評議相極申候御書付御用ニ被成候儀ニ御座  
 候哉、若又右御書付之内ニも、御作略御座候哉、

御附紙

書面之通り、名主加判無之ハ、無取上候、名主請人印ニて

も加印さえ有之候得ハ、取上可申候、尤名主借主ニて、相

名主与頭加印無之ハ、取上なき事、永代頼納と准シ候、勿

論文言悪しく、本証文取上無之分ハ、小作滞も不取上候

事、

此方伺之附紙

名主加印之儀、丑年已来は名主証文判ニて役判ニ無之候得

ハ、御裁許無之、丑年已前は此差別無之、名主加印さい有

之候得ハ、御裁許成候よし覚申候、此品以來之被 仰出奉

伺之候、

一 讓田地之儀は、丑年以前ハ新跡之無差別、讓証文持候者  
え地所讓候様被 仰付候と覺申候、是又右之通ニ御座候  
哉、戌年御評議ノ内、讓証文之儀無御座候故、為念申上  
候、

丑年以前之通り、年季明キ候質地、日限を以申付、不  
相濟候ハ、讓り地流地之文言有無ニ不構、讓候共流  
候共勝手次第申付ル、

享保八卯八月

矢部 源助

山本 伝九郎

篠田 五郎左衛門

佐山 長十郎

斉藤 又五郎

二十一 質地之事

証文之向キ

何年より何之年迄中、何年質地ニ相渡候間、御年貢諸

役其方相動可申旨認候事、定法也、

右証文ニ

年季明候ハ、其方名高ニ入可被申候旨認メ候ても、流

地といふ年季ニても受戻シ不申候ハ、此手形を以、  
何年も其方支配可被成候、と認たる質地出入ニ成候て  
ハ、心持六ヶ敷候、

又儲次第可請返旨、認メたるも有之候、

二十二 証文次第遂吟味可載許

一 頼納と申事、惣て年貢、田畑を作候者納る定法にて候、

然ル処、貸金杯之差引ニ田地作り候者ハ、年貢不納、外  
之者納候類有之、頼納にて無失之類ハ、子細不聞届、何  
れニも頼納之出入を無取上、載許致候得は、重キ御料ニ  
被 行候、

但、質地、其質ニ取候者の方より、本の地主え年貢を  
納メ、地主より上納いたし候例、

一 永代売ニ准シ証文は、年季不限質地由緒無之、讓地取上  
ケ不申事、讓地由緒有之ハ不苦、わづかなる筋目之者、

祝金を出讓請候類、間々有之候、是ハ証文ニ当年迄年貢  
金立替給ふ処、身上難相立ニ付、田畑相讓候、右為祝金  
何程、唯今請取候杯と有之ハ、不苦筋ニも候、

一流質地ハ、永代売ニは無之、

一田畑之証文ニ、名主印形無之ハ不取上事、

一田畑書入候ハ、貸金ニ准シテ不取上事、

一享保元申年以前埒明可申儀、出入ニ成候て訴出申候は、

不取上事、

一質田地年季明候ても、其年季之年数程之内ハ、相返候様可申付筋ニ候、

一小作金之儀、縦質地ハ本地主致小作候共、他人同前也、

小作証文年々仕置筈也、若年々不仕置初筈計り之証文ニ候ハ、永小作ニ可准、相对小作之地主之心次第、地

所を取放シ候得共、永小作ハ無取上候、但、小作金之滞

ハ、年貢不納ニ准シ候、金高三寄、日限申渡、凡拾両迄

は廿日或は三十日限り、拾両以上ハ五六十日を限り可取立、右一切二切過候ハ、小作人之所帶有切、地主え可

請取事、

一田畑を讓候敷、質地ニ入候敷、親類分地之儀は、其子細を具ニ書付、御代官之手代迄断届事、地主從往古之御

一定法ニ候、然れ共、近来我儘ニ成候ニ付、申届候儀無之、

因茲及訴論候ハ、名主印形有無之儀、入念を吟味すべ

き事、右之外本金さぐりと申事、国々より有之間、是ハ

貸金之代り田畑質ニ請取、壹ヶ年敷式ヶ年作り候て、無

本金ニ其田地を本地主え相返シ候定之証文有之、是ハ無

尽掛返の書入有之故ニ、証文之宛所大勢有之ハ、無尽と

心得候て取上ヶ中間敷候、此本金さぐりニてハ、年貢の

沙汰無之、本地主方済候事ニ候、頼納ニて無之候得共、

本金さぐりの仕方、怪敷事ニて候間、能々了簡可有之

也、

一出入ハ惣て証を抛とし、又抛を証とする事、法也、

但、証ハたらず、抛ハ手懸り也、

証抛無之出入ハ、無証抛とて不取上事なれ共、出入ニ依

て理非を載断する事也、

一火札を被張候者、只今迄所預ヶ置候得共、向後ハ其者怪敷事も無之候ハ、預ヶ置候儀無用ニ可仕候、尤難儀懸

ヶ不申様ニ可被致候、以上、

戊七月

二十三 元文二巳年二月御触

一名主加判無之質地証文之事

一名主置候質地ハ、相名主又ハ与頭等之役人加印無之証文之事、

一拾ヶ年季を越候質地証文之事、

右三ヶ条之儀、井田畑永代売買、又ハ地主ハ年貢諸役勤、金主ハ年貢諸役不勤質地之類ハ、前々御停止ニテ、村方五人組帳ニ書記有之処、右之通不埒之証文を以、訴出候も有之候、自今五人組帖名主庄屋等より大小之百姓等え為読聞不致亡脚候様可仕事、

一享保元申年已来、年季明候質地ハ、自今年季拾ヶ年過訴出候ハ、取上無之事、

一金子有合次第可請返旨、証文ニ有之質地ハ、質入之年ハ（拾ヶ年）過訴出候ハ、取上ケ無之事、

右貳品、自今拾ヶ年之内訴出候ハ、載許有之候、  
右年数過候ハ、取上ケ無之事、

以上

【参考】 対校本の奥書

1 「公裁之御条目」（明治大学図書館蔵「公裁録」第三冊所載）

右ハ元文五庚申年七月、於 公儀寺社御奉行牧野越中守殿、御町奉行石川土佐守殿、御勘定奉行水野对馬守殿被仰付評定所式目之分、御改被仰付出来之御書付之由、崎国屋喜右衛門取出、同閏七月下旬写持参、本紙校合畢、

2 「公裁書并御定法」（著者感）

右は公裁懐鏡、他え開書可禁之、

宝曆六年子十一月

墨付三拾五枚

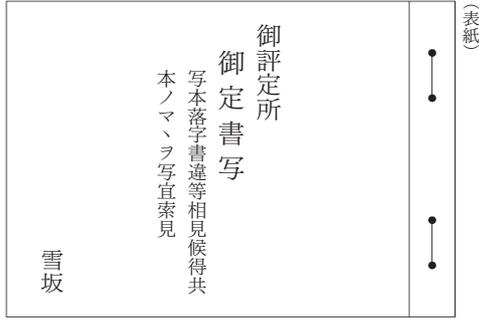
宝曆十三年八月日、甲府にて写之、小淵沢村之内

高野組

久保田又右衛門◎

六十七歳書之

二 御評定所御定書(名古屋大学法学図書室蔵)



- 御評定所御定書 卷ノ一
- 一 (公事訴訟取捌)
- 1 一 関八州方申出ル公事、御領私領共ニ御勘定奉行初判、  
料 関八州之外も、御領之分は右同断、大岡越前守支配之  
 分ハ、越前守初判え出之、
- 2 一 関八州之外も私領之分、寺社奉行初判、但、関八州之

- 内ニても、寺社奉行之分は右同断、
- 3 一 五畿内・近江・(丹波)・播磨国は、京・大坂町奉行え  
 可訴出、但、国々々余国へ掛ケ候出入ハ、寺社奉行ハ  
 初判出之、
- 4 一 町奉行支配之町之出入は勿論、江戸之内寺社奉行支配  
(文) 之者ハ町奉行之支配之者え掛候出入、右御勘定奉行初  
 判出ル、江戸町端ニ有之江戸之者へ掛り候)出入共、  
 一座裏判不及出、双方之家主・名主・組頭・五人組立  
 合、来ル幾日迄可済、不相済ニおゐてハ、幾日可出  
 旨、其筋之役所押切裏書出入、其上ニて評定所へ出  
 ス、
- 5 一 地頭違又は一地頭之内百姓出入、両様共地頭断有之  
 上ニて取上ル、且一地頭之取捌ニて可事済儀ハ、地頭  
 え申談、其上ニも不相済候得は取上ル、
- 6 (一御料所之百姓出入、其所支配人添状無之ハ、不取上  
料 之)
- 7 一 御領之百姓、其所々之支配人何之訳もなく押へ置候  
 歟、或ハ裁許之次第難受、再往願候ても無取上、奉行  
 (所)へ訴出、支配人心得違之趣相聞え候得は、支配人

奉行申合、宜取計、其上ニも訴訟得心不致候は、奉行所にて裁許申付ル、

8 一私領之百姓、地頭之願候時、久敷不取上、或は裁許之次第難受、再往願候ても取上無之、奉行所へ於訴出は、右同断、

9 一奉行所諸役所并於私領ニ、前々裁許有之候て事済候儀、経年月、於右裁許非分之由にて再応吟味願候共、

無取上、然共、訴訟方慥成請人等有之、相手方ニハ証<sup>(証)</sup>拋無之、先裁許必過失と相見へ候は、伺之上詮儀可有<sup>(取)</sup>

掛、若双方証文有之ハ、再吟味之願無取上、但、相手不尋して不叶儀も候は、其所之支配人或は地頭え一通り相尋、猥ニ相手不召呼、

10 一再吟味之願理分ニ聞候共、双方対決之上ならてハ理分難相決、又は檢使不遣候てハ不被明之義は、慥成証拋無之ニは、再吟味無取上、右は惣て訴訟人願ニて再吟味之事にて、奉行所ニおみて評議、前々裁許改候義は格別也、

11 一重御役人并評定一座、知行之出入は、伺之上裁許申付ル、但、大目付以上也、

質地借金公事は、定法有之故、伺ニ不及、論所見分裁許、伺帖<sup>(文)</sup>ニ証文之内父言又は古キ帖面を以証拋ニ引ハ、其事之員數、或古絵図にて(極候儀ハ、右絵図入用之所計絵図ニ記之、見分絵図ニ)も白紙付<sup>(題)</sup>(紙)之肩ニ、訴訟方相手方杯夫々之趣号を書記、

二 (国郡境論)

1 一 国郡之境、川附寄之例は不用之、

2 一 国郡境は、官庫之絵図或ハ水帖次第、

3 一 官庫之絵図ニ、国郡境ノ山を双方より書載之、双方共外証拋無之ニおるては、向所之中央<sup>(論)</sup>可為境、

4 一 国郡境、峯通方谷合見通し可為境、

5 一 官庫之絵図ニ論所を半分程載之、一方全ク載之、外ニも証拋於有之は、勿論全ク載候方可為理運、

6 一 国郡境、山論、水分は峯通り限境たり、

7 一 先年之裁許絵図折様<sup>(符題)</sup>、仕直度由訴におみてハ、相手方之絵図相渡、可為写旨、訴状裏書ニ一座令印形、遣

之、

三 (山野入会村境論)

- 1 一双方証掘有之、大道筋或は川中央、又は峯通谷合見通し、水帖次第古田畑等境たり、
- 2 一死馬捨場等ハ、村境之不及沙汰、近村入会たるへし、
- 3 一内山居林等え、(地元)元地之外えは入会禁之、
- 4 一内山境無之と云共、地元之古畑等於有之は内山たり、
- 5 一入会も数十年新開致といへ共、地元も訴後におゐてハ、不及荒之、年貢地元之村え入会より納之さすへし、
- 6 一地元たりといふ共、近年之新開新林等可為荒之、
- 7 一入会場之雖道多と、(敢て)放之入会之証掘等不用、
- 8 一名田同意之茅野等、地主不得心之上は、外より新田等願候共、無謂外え不免之、
- 9 一入会にて無之(草)札等之場ハ、田高(二)応し苅之、
- 10 一入会之(野)新開筈等は、高(二)応して割合之、
- 11 一新開立出たり共、理不尽に於代荒は、(代)過料、
- 12 一他之入会場え紛入、苅取は、過料、

し、

- 13 一秣場え之仮橋、他之往来禁之、
- 14 一別村ニわかるといふ共、官庫之絵図郷帖次第たるへし、
- 15 一畑廻之秣場ハ、畑困久根中央之内外壹尺五寸宛、都合三尺除之、(刈)秣外取之、

四 (漁獵海川境論)

- 1 一川(ハ)付寄次第、流に随ひ中央境たり、
- 2 一川向ニ有来ル地面ハ、先規に任せ、飛地可進退之、
- 3 一魚獵藻草、中(虫)限取之、
- 4 一藻草に役錢無之、獵場之無差別(ハ)地元次第取之、藻草に於障ハ、新規ニ魚獵禁之、
- 5 一御菜鮎并運上於納は、川通地村前之無差別、(他)入会鮎獵致之、無役之村ハ村前ニ可限之、
- 6 一魚獵入会場、国境之無差別取之、
- 7 一藻草、漁獵場障ニおゐてハ禁之、
- 8 一磯獵は地付根付次第、沖は入会、
- 9 一小獵は近浦之任例、沖獵願におゐてハ新規ニ免之、
- 10 一浦役永於有之は、他村前々(浦)魚獵たりとも、入会之

例多シ、

- 11 一 浦役（永）於無之ハ、居村前之浦多クとも、愚獵禁之、
- 12 一 船役永は、沖獵或ハ荷船可為繫役、
- 13 一 海境分木は式本立例多し、一本ハ可為浜境、壹本は網干場境、
- 14 一 運上船之役ハ、磯方湊へ壹里程限之、
- 15 一 関東筋鯨繩、諸獵之防ニ成故停止之、
- 16 一 壹本針ニて鯨釣候事、為禁外、
- 17 一 鯨獵は、拾四丁之内可限之、
- 18 一 入海ハ兩頬之中央限之、村前村境見通し可為境、

五 (田畑埜論)

- 1 一 御朱印境内ニ、数年百姓開来ル(田畑并)家(居)等可為有来通、年貢ハ伺旧例、越石等は其寺社領え取納、夫方越石之地頭え納之、
- 2 一 川付寄之事、大水ニて自然ニ川瀬違、高外之新田地又ハ見取場・小物成場・秣場・河原・林原地等之無高有地所は、附寄次第也、然共、川除等之仕形ニ依て、手段を以川瀬違候類は、付寄之例不用も有之事ニ候、依

之新堤築出し等、其村々次第に任せ、川中え仕出し候儀、制禁也、勿論高内之分は附寄之不(及)沙汰、川向之附寄地と飛地(三)、進退申付ル定法也、

- 3 一 本田高之川欠附寄は不及沙汰、地先を限、川向之附寄地を欠地反別ニ応し、飛地之積り渡之、
- 4 一 御朱印地畝歩不足之類は、数多有之、依て訴訟不取之、
- 5 一 檢地之地先見取場等、地頭より附寄たりといふ共、証拠於無之は、地頭え取上候年貢は、御藏入たるへき事、
- 6 一 他之地先を開込におゐてハ、為返之、仕形不埒は、不納之年貢為取之、
- 7 一 居村之地内村前は、他村方竿請之新開発有之、其新発之先たりといふ共、於居村之地内は(不立之)、新発之外綺事禁之、
- 8 一 先地頭之除地ハ、当地頭之可為心次第、
- 9 一 双方為持地証拠無之におゐてハ、公儀え取上之、村中又ハ名主預ル、
- 10 一 木薪は双方立合伐之、

11 一永小作并数十年預來ル地面ハ、無謂取上禁之、但し廿年を永小作と云、

12 一竿請之田畑、於切崩ニハ、手錠(鎖)或ハ過料、

13 一出作之百姓年貢高役等、内証相對ハ格別、村並本(百)姓同様之高割勤之通例也、

14 一水帖(ニ)も不書載新開場、行水(之)障に成におみてハ囲取扱、可為流作、

六 (堤堰用水論)

1 一私領ニテ新田新堤取立ル事、双方地頭相對之上之儀ニ

付、障無之様可申合と申談、願不取上子細有之、難濟儀は格別、

2 一用水掛引井路之儀、川中ニ井堰ヲ立、水を引合候所、

堰之仕形(カ)に、川下之井水不足(ニ)も不構、手前勝手宜様

ニのミ仕候故、及爭論、或は兩頬ニ井口有之場所、片

頬之井口付かへ候時、双方不申合、一方之伺自由(任)に仕

かへ候故、及訴候類有之候、右躰之儀は、双方致対

決、普請仕候節ハ立合、無障様可致、若滞儀有之又ハ

不法之事有之は、其節(ハ)十二月を限り、於訴出ルは裁

断有之、右期月過、令出訴ハ無取上之、

3 一御領私領組合普請、私領分計り自普請願ニおみてハ免之、

4 一當時用水不引といへとも、古來(ハ)之組合離候事禁之、

5 一往還橋普請、組合新規ニ申付ル例有之、

6 一用水人足諸色組合惣て高割合、

7 一用水ハ、田反別多少ニ応し可為刻割、水水門(マ)之寸尺定ル、

御評定所定書 卷ノ二

8 一御領之時、水代雖不出之、他領に分ルにおみてハ、新規ニ直之、

規ニ直之、

9 一用水論、容易(ニ)不取上、双方之役人立合、無滞様為濟之、

但、十二月を過、於訴出は不及沙汰、

10 一畑成、用水に障におみてハ禁之、

11 一新田新堤、双方役人立合、於障無(ハ)にハ、為取立之、

12 一堤重置於障有之ハ、削(禁)之、

七 〔証拠証跡用不用〕

- 1 一 寺社領争論、縁起ニ讓状を以申出ル時、御朱印之表、（面）  
寺社領縁起之通と有之歟、或ハ縁起讓状御国絵図に名  
所致符合、書面も疑敷無之ハ取用、
- 2 一 山論境目秣場出合田畑論、先奉行之裁許之書付・古水  
帖、且古来御代官所之時裁許案、（状）或は地頭捌置候書付  
差出シ、御国絵図ニ符合候歟、又は地所無相違候得は  
取用ル、
- 3 一 寺院後住争論、先住遺状、讓状慥成書物は取用、又は  
百姓町人、家督出入にハ（讓状）正敷書付は用之、（物）
- 4 一 惣て古キ書物、印形無之ニも慥成書付にて、水帖又は  
地面符合候書面、且扱証文・（山手証文）・名寄帖印形  
有之、年貢等納方無相違は取用、
- 5 一 先領主地頭之帖面書物、其外古来之書付、無印形とい  
へとも、慥成ニおゐてハ用之、
- 6 一 名所字無之証跡は、不用、
- 7 一 他（之）水帖書物等、論所之証跡（拠）と偽之、字等於書替  
は、死罪或ハ遠島、
- 8 一 慥成書物等有之処、不埒之証文等取之、為証拠於差出

ハ、戸ヅ或は所私、

- 9 一 証拠ニ可致工ニ、不埒之書付等取、於差出ハ戸ヅ、或  
は名主庄屋之役義取放、

八 〔馬繼河岸場市場論〕

- 1 一 馬繼場、国絵図次第たるへし、
  - 2 一 人馬相對にて助合来（ル）上ハ、公役之外ニも指滯可  
勤之、
  - 3 一 人馬繼之場所え寄、合馬出之といへ共、私之人馬繼禁  
之、但、馬繼場と相對ハ格別、
  - 4 一 人馬繼、往還之外狼（通）脇道道路停止之事、
  - 5 一 諸荷物直売、手馬（を以附通候分は、北海道たりとい  
ふとも無構可通之、
- 脇往還ハ勿論なり、
- 6 一 商人え売渡候諸荷物、手馬にて馬繼場ヲ附通候事  
禁之、
  - 7 一 双方無証拠馬繼場ハ、双方月代りニ馬繼可致之、
  - 8 一 脇道之（分ハ）、旅人勝手次第可為致馬繼也、
  - 9 一 脇往還ニおゐてハ、御朱印之外、雇人馬不足之分ハ

不及其斷、

10 一往還荷物(理不尽ニ於差押ハ、過料、)

11 (一大坂荷物)ニ京都之荷物を入為下、京都之飛脚屋及

難儀候由ニテ、道中ニテ理不尽ニ押切ほとき候者、古

例獄門、

12 一中絶之市、障り有之ニおゐてハ禁之、

13 一私ニ新市建事、停止之、

但、障り無之ハ免之、

14 一市場近所え無届して新町屋停止之、

15 一河岸場ハ河岸帖次第也、

16 一市場は村鑑次第也、

17 一河岸帖ニ不載分ハ、地頭等カ并村入用之荷物外は運送

禁之、

九 跡式(家)督養子等之事并夫妻離縁先住遺跡之事

1 一父致養子、跡式於極置は、雖為実子、跡不継之、

2 一父跡式於不極は、血筋近ハ、可為相統也、

3 一父死後、後家儀外え於縁付は、先夫之名請可差綺様無

之、筋目之者可相統也、

4 一遺状之通家屋鋪讓分ヶ候ては、跡致断絶、或は母は妾

(三)て外え嫁候由、親類雖申出、悴無之相果候者之家

財ハ、母之心次第たる上ハ、讓状之通母えも跡式分

之、

5 一重病之節、一判之讓状は不取用、

6 一跡式相統之總領を差置、外之悴え跡式可讓(との遺)状

は、不法也、然といへとも於讓状慥成は、有金家督之

悴七分、外之悴三分、家財田畑等ハ、家督之悴可為相

統也、

7 一致家出、養父死後立帰候は、養子は跡式相統不成、

8 一当人相果、借金有之跡式、親類之内ニも望(無之)ニお

ゐてハ、借金之方え家財(可)為分散古例也、

9 一先住後住之遺言有之所、外之出家ヲ後住ニ可任旨申と

いへとも、法式之儀且方可差綺謂無之、不及沙汰、

10 一当人相果、跡式之儀遺状も無之、親類等不埒之儀を於

致訴論ハ、

公儀跡式取上之、

11 一婿養子離縁之上ハ、出生之男子ハ夫之方え可引取、引

出物ハ相互ニ返之させ候事、

- 12 一夫死後、後家え養子あたり悪敷といへとも、於不慥は後家心儘ニ外え可讓分筋無之、
- 13 一婿養子父子不和にて、実方え立帰罷在、去状不遣差置、妻(を)引取り度旨申といへとも、無謂ニ付不及裁許、
- 14 一婿遺跡、妻養子之氣ニ不入、離縁之上は、持参金ハ不<sup>(之)</sup>及裁断、養子ハ諸道具、去状遣候上にて可為返之、
- 15 一実子出生以後不和にて、養子家出致度といへとも、父不埒ニ付、養子可為引取、
- 16 一養父仕方悪敷由にて、養子仕方穩便(二)無之、実父方え帰ルニおゐてハ、持参金相対ハ格別、不及裁断、
- 17 一自分之悴を(養子ニ可遣巧ニ離縁之於致腰押ハ、追放)放、
- 18 (一)婿養子不縁たりといへとも、縁組之証(文)も不取替、婿養子方離別状(も)不取替、剩双方外え片付候上、及訴論類は、不埒之仕方ニ付、持参金公儀え取上ル、
- 19 一養子を妨候者、品ニより牢舎之古例、
- 20 一妻之諸道具・持参金相返上ハ、離別之儀は夫之心次第、
- 21 一外之女を後妻ニ可致巧ニ、離別致ニおゐてハ、右之(女を)妻ニ為致候儀ハ勿論、出入共ニ差留ル、
- 22 一懐(胎)候共、離縁之儀は夫之心次第也、出産之上、男子ハ夫之方え可引取、女子ハ妻(之)方え可差置、
- 23 一妻も親元(儀)え帰リ居候儀、三四年過、於夫訴出ハ願後(礼)難立、乍然去状不取置も不埒ニ付、一応夫之方え呼戻シ候上、離別状可為渡、
- 24 一離別状雖不遣、夫之方方三年以來於不致通路ハ、外え嫁候共、先夫ノ申分難立、
- 25 一離別之証抛無之、女房親元え参居雖相果候、(諸道具)・持参田畑不及返、夫之心次第たるへし、
- 26 一悴相果候付、娘(ヲ)取差戻類ハ、持参金之不及沙汰、諸道具ハ可差戻之、
- 27 一先夫之離別之事、慥ニ不承届、去状も無之、親ニも得心不為致、女と申合由、理不尽ニ外え於引取ハ、重キ過料、士ハ品ニ方追放、
- 28 一右女(被)と離別候共、自分として立去、親えも不為致得心致家出、去状も不差越内、外え男を持ニおゐてハ、髪

を剃、親ニ渡シ、以後外え片付候事ハ、親之心次第、不義之男之方通路留之、

29 一 右不埒(之)取持人ハ、過料、

30 一 女房得心も不致に、衣類等質物ニ遣ニおゐてハ、不縁之事、妻之親之心次第、女房難添子細相立、於致家出ハ、女之親元え諸道具為返之、

31 一 去状(不)被取替上ハ、為添(又)之儀不及裁断、

32 一 養子合之女房、夫を嫌致家出、比丘尼寺え欠入、比丘尼三年勤之、暇出候旨訴出は、実方え為引取之古例、

33 一 夫を嫌、髪を切候て成共、暇取度由女房申、又は夫え申掛致類ハ、比丘尼(に)成、縁切せる古例、

34 一 久離帳ニ付置といへとも、被致離別候者之子引取人於無之ハ、久離之無差別、其親類預ル、

35 一 欠落之届致置といへ共、勘当之届ニも無之、外え可引渡者無之ニおゐてハ引渡之、

36 一 離別之事、断を請、女之親欠落、引取人於無之ハ、溜か預ケ、  
村か預ケ、

37 一 離縁之上同町ニて同商売致ニおゐてハ、養父え対、不遠慮ニ付、養子所を立返せる也、

38 一 及出入、沽券証文於無之ハ、家屋敷公儀え取上之、

39 一 讓証文計致所持、沽券不致所持ハ、(元)地主預りたりといへ共、元金差出させ、讓証文と引替之上、家屋鋪元地主え為渡之、

#### 十 離旦寺社

1 一 無謂離旦不致之、

2 一 旦那寺(三)不似合無慈悲成致方に付、致離旦ニおゐてハ、婦旦之不及沙汰、

3 一 心願有之、其身一代改宗致ニおゐてハ免之、

4 一 父之遺言於有之ハ、改宗心次第たるへし、

5 一 祈願所は、婦依次第也、

6 一 離旦之上石塔迄(引)取候処、年数過、申出おゐてハ、婦旦之不及沙汰、

7 一 離旦之証文押て印形取候におゐてハ、所払、其品輕クハ、戸ズ、

8 一 (一)女子ハ母之宗門ニ成候例有之、(女)男之子父之宗門ニ成候(定例)、

9 一住職出入雖有之、宗旨証文印形(可)差延謂無之、寺附之印形を以証文差出させへし、

10 一前菩提所え不斷、宗旨証文印形致におゐてハ、戸ノ、

11 一開基旦那ハ、過去帳次第なり、

12 一後住之儀、開基旦那ハ格別、旦那ノ不為差綺、

13 一旦那を疑、宗旨印形於滯ハ、逼塞、

14 一新寺地致寄附ハ、地面

公儀え取上之、其所之名主組頭、戸ノ、

15 一寺法を差綺、本寺ノ之触書、名主印形(を)以、門下ニ

於相触ハ、役儀取上、戸ノ、

16 一我儘ニ寺号於取替ハ、戸ノ、

17 一墓所も無之一村之助合ニて相統之堂地ハ、寺号停止之、

18 一吉田家之許状於無之ハ、神主不立、然共、品ニ社役免之為勤之、

19 一忌中ニ祈願所ノ不致諸祓法も無之、

十一 質田(畑)

1 一知行所田畑質地ニ入させ、地頭用金借(出)させ候事、

停止之、

2 一質地倍金手形之義ハ、無取上、(分)

3 一小作(滯)、日切ニも不相濟候得共、小作人身代限、諸道具不殘相渡させ、田畑は小作金之多少ニ応し、年数(を)限金主方え為渡、年数過、小作人え為返之、但

シ、小作人所持之田畑質地ニ入候ハ、田畑不持者同前、諸道具不殘為渡、家屋鋪為渡さる也、

4 一質地滞金米

五兩 以下 卅日切  
五兩以上(拾兩迄) 六十日切  
五石以上(拾石迄) 百日切

拾兩ノ五拾兩迄 百日切

五十兩ノ百兩迄 式百五十日切  
五十石ノ百石迄 七ヶ月切

百兩 以上 十三ヶ月切  
式百石 以上

5 一流地ニ直シ小作滯ハ、棄捐ニ可申付、但、前小作滯(別)ハ、右通例日切可申付、

6 一酉年以來之質地証文不宣、借金ニ准し候分、前小作滯(別)も借金ニ准し、小作人ニ濟方申付也、

7 一名田小作(は)、証文(又ハ)帳面ニ印形無之は、地主不念(三)付不取上、

地ハ、証文証文之通申付、但シ、期月ニ至リ、前広ニ訴出候ハ、為請返申へし、

8 一名主加印又は名所無之証文は、取上無之、質置主名主

18 一御朱印地田畑、質物ニ取候事、停止之、

之時、組頭加印無之ハ、取上無之、但シ、酉年以來ハ借金ニ准シ、本証文無取上分は、小作滯も無取上、

19 一質地年季之内ハ、年貢諸役双方相對之上、極置候通為勤之、流地ニ成候義ハ、本百姓並勤之通例、

9 一水帳と相違之質地証文ハ無取用、借金ニ准ス、

20 (一質地年季之内請戻之儀、地主訴出候共、相對ハ格別、年季之内ハ無取上、)

10 一年久敷証文ニても、享保年中之年延(添)証文於有之ハ、定法(式)之質地濟方申付之、

11 (一及出入、肩書於出入ハ、手鎖、)

十二 借金家質

12 一質入地或ハ他之小作他之稻、理不尽ニ苟取、又作付手

入致之ニおゐてハ、戸ノ(或ハ)過料、

13 一名主証人等乍存、於不差留ハ答ル、

14 (一無証拠不埒之証文を以、及出入おゐてハ、地面 公儀え取上之、

儀え取上之、

15 一宛所無之証文は、不(取)用之、年号無之も同断、

16 一年貢未進於有之ハ、田畑質入致スといへとも取上之、

売払代金を以、地頭方年貢未(進)皆済、殘金を於有之

(ハ)、金主(え)割賦、

17 一質地年貢之内不請返候は流地ニ致候段、証文ニ有之質

5 一借金并書入金高利ニ当り候分、壹割半之利足ニ直し済

1 一享保十四西以前之借金出入は、取上なし、

2 一武士方借金、日限申付置候処、跡式断絶ニ付、一類之内ニ別ニ領地被下(候)方ハ切金を為相濟度旨、金主申出

といへとも、不及沙汰古例、

3 一養子之借金、養父(之)家来手形致置といへとも、養子

実父方え相帰シ候上ハ、不及沙汰古例、

4 一先住借金有之候段当住不存、(本寺)触頭方も不申聞ニ

付、致入院ニおゐてハ、後住不及返済、先住之弟子并

請人方済之古例、

- 方可申付、奥書ニ記雖有之、印形無之ハ無取上、
- 6 一町人百姓滞金申付方、借金高ニ多少ニ不構、三十日切之度々切金を為差出、出金之仕方不埒ニおゐてハ、手鎖懸、猶又滞候ハ身代限申付ル、(武士方ハ)日切之度々切金申付ル、
- 7 一借金証文ニ加判人於有之ハ、当人・加判(人)両方共之濟方申付ル、畢竟相對之事故、濟方申付節之証文ニ、家主不及加判、
- 8 一家質地濟方日限、四五拾兩六十日切、六七拾兩七八十日切、百兩百日切、
- 9 一家質利金、三ヶ月滞候分ハ訴訟不取上、三ヶ月余も於滞ハ濟方申付ル、
- 10 一白紙手形ニて於致借金ハ、証文破捨、二三拾兩過料申付ル、
- 11 一諸寺院ハ什物・仏具・建具等書入、又は売渡証文ニて金銀借り候当人証人共、咎申付、尤金銀子濟方も不申付、
- 12 一帳面ニ記置候借金、印形無之、附込帖書入有之共、無取上、
- 13 一寄附込帖、其一日ニ大勢え幾口も売懸候分、売場之順ニ附込候事故、印形無之候共、取取濟方申付ル、一日ニ壹兩(人)之売口又は日数隔記候ハ、附込帖と申ニて無之付、無取上、
- 14 一先住之借金、当住不存旨雖申之、先住借金も有之ハ致入院間敷旨、不相断ニおゐてハ、当住又ハ証人ヲ為濟之、
- 15 一車借錢日なし錢、取上無之、品ニハ双方咎申付ル古例、
- 16 一無尽金、惣て仲間金出入、無取上、
- 17 一兩人連判ニて金子借り請候処、忝人於相果は半金為濟之、返金致といへとも請取書せ不取置、当人欠落致、無証拠たるに依て、残り忝人ハ半金為濟之、
- 18 一証文雖有之、貸金ニ候哉、代金ニ候哉、於不相決ハ、半金為渡之、
- 19 (一)通例之借金を奉公人請狀ニ認、給金と申立といへとも、実は奉公人も無之、不埒ニ付、訴訟不取上、不埒証文致させ不届(二)付、為過料借金取上之、
- 20 一名主五人組印形無之ハ、家質ニ難立、借金ニ准ス、

21 一借金筋ニ付ては、店之宿を家主ニ不預、

寛

一質地証文ニ、年季明不請戻候は可致流(地)由之文言有之  
分、年季明早速訴出候共、流地之旨申聞、請戻シ之儀申  
間敷候、

但、期月ニ(至リ)前広ニ訴出候ハ、取上可申候、

(一)右流地証文之直小作滞、訴出候節ハ、地面金主え流  
地に為相渡、小作滞を棄捐ニ可申付、

但、別小作滞ハ、通例之ことく日限可申付、

一質地証文ニ名所又ハ(名主)加判等無之候ても、享保十四  
酉ノ年以前之分ハ借金ニ准、元金小作共ニ三十日切申付  
候間、別小作滞も是又借金(ニ)准シ、小作(人え)濟方可  
申付候、

但、高利ニ当り候ハ、直小作・(別小作)共、壹割  
半之利足ニ直シ濟方可申付、

一名田小作ハ、無判之帳面ニ記有之候ても、只今迄濟方申  
付候得共、証文又ハ帖面ニ印形無之ハ、(地主)無念候  
間、向後取上申間鋪候、

一帖面ニ付置候借金、印形無之候ハ、日寄附込帖ニ書入  
有之候共、取上申間敷候、

一附込帳は一日之内ニ大勢ニ幾口も売払候分、売場之順ニ  
書入候事故、印形無之候ても、取上裁許仕来、一日ニ壹  
人式人之売口、又ハ日数隔記候様成は、日寄附込帖と申  
ニて無之間、取上申間鋪候、

一旅商等之帖面、其村之宿又ハ口入人之印形計取置、売懸  
候分ハ、向後取上間敷候、

一質地借金売掛等証文、不埒ニて無取上類、又ハ享保十四  
酉年以前之分も、近年之質(金)之様申出、裏判附之類有  
之候、右訴出候節、証文帳面等為差出相改、吟味可成  
分、初判可出候、只今迄も右之格ニ候得共、相談之上、  
弥右之通相改候事、  
右之通一座申合候、以上、  
元文三年午二月廿五日

評定所御定書

卷ノ三

十三 (裁許破綻背)

1 一裁許破難渡之者、牢舎或ハ手鎖、裁許請可申旨於申出

- は、赦免、
- 2 一 難立儀、強訴ニおゐてハ、閉門・戸<sub>ノ</sub>、田畑取上所  
 払、或ハ追放・遠島、
- 3 一 先裁許於申紛は、戸<sub>ノ</sub>・手鎖、或ハ過料・追放、
- 4 一 先裁許を疎致(ニ)付、於及再訴は、名主役取放、戸<sub>ノ</sub>  
 或ハ過料、
- 5 一 地頭又は支配頭之背裁許、難立儀於致強訴は、戸<sub>ノ</sub>・  
 所払・(過料)、
- 6 一 立合絵図、久鋪滞ニおゐてハ牢舎、於致訴訟は赦免、  
 鐵炮打捕候者は、御褒美銀式拾枚、訴人之者は、銀五  
 枚被下之、
- 7 一 追放・所払之御仕置於不請ハ、遠島或ハ追放、
- 8 一 掟を背、脇差帯候ものハ、脇差取上、手鎖、
- 9 一 町人百姓、刀を帯ニおゐてハ、江戸在所追放、
- 10 一 名主役被召上、浪人之由偽、帯刀(ニ)おゐてハ、追  
 放、
- 11 一 捉飼場ニてもち繩張候ニおゐてハ、過料、其所之名  
 主、戸<sub>ノ</sub>或ハ呵ル、
- 12 一 捉飼場殺生人有之処、於不相改は、村中へ過怠鳥番  
 人、春<sub>ノ</sub>秋迄、或ハ一ヶ年為勤之、其所之野廻り不念  
 ニおゐてハ、野廻役取放、捕候ものハ、御褒美金五兩  
 料、
- 13 一 飼付之鳥追立ニおゐてハ、戸<sub>ノ</sub>、或ハ追立候ものハ、  
 為過怠名主え預ケ、見出シ候者ハ御褒美金被下之、
- 14 一 (隠) 鐵炮於致売買は、田畑取上所払、口入人、過料、  
 名主組頭、不相改不念ニおゐてハ、過料、村中過怠鳥  
 番人申付ル、
- 15 一 御鷹場ニて隠鐵炮打ニおゐてハ、遠島、名主(ハ)田畑  
 并役儀取上、組頭ハ過料、村中は過怠鳥番人申付之、
- 16 一 遊ひもの留置候は、名主役取上之、戸<sub>ノ</sub>、組頭過料、
- 17 一 欠落者困<sup>カウイ</sup>置候ニおゐてハ、過料或(ハ)戸<sub>ノ</sub>、
- 18 一 願立候事を致願捨、在所え於帰ハ、過料、
- 19 一 奉行所之申付(ニ)由、偽申ニおゐてハ、其品輕クハ、  
 過料、
- 20 一 度々差紙を請、不参候者は、其品輕ハ過料、或ハ過怠  
 として宿預ケ、或ハ牢舎、
- 21 一 相手相果候を推隱、相手取裏判取之ニおゐてハ、過

- 22 一難立儀を於致強訴は、其品輕ハ、過料、
- 23 一御代官・地頭ニテ吟味之内、致直訴ニおゐてハ、過料、
- 24 一二重質取(遣り)候者ハ、過料、
- 25 一神木たりといへ共、入念之地ニテ理不尽ニ伐採ニおゐては、神主逼塞、
- 26 一他村之者、其村之者ニ成、出入ニ携、訴出ニおゐてハ、戸<sup>ル</sup>、
- 27 一重禁制之儀致といへ共、前方相延<sup>(止)</sup>ニおゐてハ、過料、
- 但、人殺盜賊等雖相咎、境も無之事故、別段、
- 28 一戸<sup>(其料)</sup>雖無之、詮儀之節影を隠ニおゐてハ、戸<sup>ル</sup>、
- 29 一目安裏判似セもの、由奪取ハ、田畑家財取上、所払、
- 30 一証文ニ人主・請人之無差別、召抱候者ハ、戸<sup>ル</sup>、
- 31 一押て縁組之儀申募ニおゐてハ、本人取持人共、手鎖、
- 32 一追放之義を改<sup>(存)</sup>なから、御構地え差置ニおゐてハ、所払、
- 33 一御法度之宗旨をたもち、勤候出家頭取、遠島或は追放・所払、改宗之者ハ、誓詞之上赦免、右(三)付、仕方不埒之ものハ、戸<sup>ル</sup>・過料、
- 34 一役人え賄賂差出、其品輕ハ、手鎖或(は)役儀取放、
- 35 一御成先ニおゐて、無筋訴状差上ニおゐてハ、所払、
- 36 一出家・願人・座頭・穢多・非人、從公儀、不及御仕置類ハ、其頭・触頭等え夫々ニ引渡、法之通可致之旨申渡之、
- 37 一人殺之儀を内証ニテ済候とて不訴出ものハ、所払、名主ハ、役儀取上戸<sup>ル</sup>、組頭(同断)、内証ニテ葬候寺院ハ、閉門、
- 38 一手負人を不訴出おゐてハ、五人組は過料、名主ハ戸<sup>ル</sup>、
- 39 一閉門赦免可申付之呼出候処、月代剃、(出)ニおゐてハ、又閉門、
- 40 一質<sup>(置主ニも不知セ)</sup>不知セ置主ニも、証人方質物於請返は、過料、
- 41 一割半も持參不致所、質物為請返おゐてハ、利金 公儀え取上之、
- 42 一当分之事ニ証文致所、金主借金(之)代り、建家等無断卒爾ニ取壞ニおゐてハ、如元造作致為返へし、
- 43 一商売仲ヶ間之法を背ニおゐてハ、過料、
- 44 一(一)口論之場え出合、致(打)擲ニおゐてハ、身代限り

- 取揚、所私、
- 45 一 過料申付(候)者相果、悴於無之は、五人組ニ為出之、  
相果候届延引候は、名主押込、
- 46 一 新規ニ祭を仕立、村々え送り遣におゐてハ、頭取并其  
村ハ名主・組頭、追放之古例、
- 47 一 無下知村々人足為差出雖遣、賃錢相渡におゐてハ、  
牢舎之古例、
- 48 一 先触を(違)、村々ニて無用之用意為致ニおゐてハ、  
追放之古例、
- 49 一 口割通分を其道致置故、及出入ハ、名主役儀を取上戸  
(可)(返)ノ、組頭同断、
- 50 一 師匠ハ、弟子不埒ニ付、家業(構)候儀心次第たるへ  
し、
- 51 一 (一重キ事ニ付偽申触候類ハ、家財取上、江戸払或ハ重  
追放) (候)
- 52 一 遺言を以かたわニ成候程疵付候者ハ、入墨之上遠島非  
人手下ニ申付へし、 (國)
- 53 一 偽もの之儀を存ながら、証人ニ立候者、追放、
- 54 一 証文(之)宛所切、書替候者、借金過料として取上、 (意)
- 55 一 証文(ニ)知人之名を記し、外之印形を押候之者ハ、重  
追放、
- 56 一 出入(不)相濟内は、論所え立入間鋪候旨申渡候処、相  
背於立入は、過料或(ハ)所私、
- 57 一 無証拠之義及強訴、剩差紙を以呼出候者(を)致相對不  
差出、奉行所を蔑にいたすにおゐてハ、追放、訴訟人  
と相對之上、不罷出相手は、過料、
- 58 一 無取上願、書付を以委細申渡、重て願出候ハ、過料可  
申付旨申渡シ、其上ニて於訴訟出ハ、(過料)、奉行所  
ニて不取上願、筋違え罷出、吟味之上弥不取上願ニお  
ゐてハ、再過料、 (願)
- 59 一 親子兄弟其外(之)親類(ニ)ても、御科御免之願、且裁  
許之儀ニ付てハ願は、別段之願ニ付、先は不及咎、 (意)
- 60 一 当人難願障も無之処、親類縁者之由ニて訴訟差出候  
共、当人願可申旨にて、無取上、 (意)
- 61 一 惣てものゝなましへ、異説虚説申触申(候)者は召捕、  
急度御仕置、
- 62 一 廻船(ニ)植木庭石其外遊山道具之類、積廻候事停止、 (意)
- 63 一 破船之節、取上荷物之内、浮荷物は式拾分一、沈荷物

十分一、

但シ、川船は、浮荷物は三十分一、沈荷物は二十分

一、取上候者(ハ)為取之、

64 一品川湊之内廻船舟懸之内、小船乗、出シ買出シ売停  
止、

65 一人殺其外重科有之欠落者は、(其者之)親・伯父・女  
房・悴等ニても、可懸者を牢舎申付置、其外之親類、

其所々之名主五人組等ニ尋申付也、日限大概三十日  
(限)或ハ五六十日(切)、百日切とか尋申付候、但、廻

国等ニ出可尋と申者無取上、

66 一科有之、逐電欠落致候者、尋申付之義、主人ヲ家來、

親を子に、兄を弟に、伯父を甥(ニ)尋候様ニ不申付定  
法也、

67 一尋之者不出候は落着難成とて、其一件差延置候ては、  
構無之者之難儀(ニ)付、六ヶ月を限、不尋出ニおゐて

ハ、尋之者は過料、其品ニ方相当(之)科申付、欠落人  
は見当次第召捕可來、見遁シに致、外方見出シ訴出候

は、猶又可咎旨(証文)申付、一件御仕置落着申付、

68 一火付盜賊惣て重科人之内同類ニは無之、(被類)其者ニ衣類、

住所ヲ隠し或ハ立退セ候ものハ、死罪、(戸)

69 一欠落人之給金は、濟方請人え申付、若シ於滯は身代限  
り申付、

70 一取逃引負等之欠落者、請人え三十日限尋申付、不尋出  
ニおゐてハ、請人身代之様子ニ寄、過料輕クも申付、(重)

欠落は六七度ニ及、尋出さず請人は、為過料身代四五  
分或ハ二三分、相応ニ取上ル、若奉公人と馴合、不尋

出におゐてハ、其請人御仕置申付、(欠落人)落着ハ尋出シ、取  
逃物売払候は、買主方為戻、金子持セ(秤)遣捨候事分明

ニ候ハ、はずたり、尤請人え給金計濟方申付、但、請  
人方下請人え懸り願出ニおゐてハ、下請人え三十日限

申付、惣て請人方濟方金子、請人・人主え兩人ニ申付  
之、濟方不埒ニおゐてハ、兩人共(ニ)身代限り申付、

71 一取逃引負之儀、請人兼々存知候様子にて候は、急度逐  
吟味、落着次第請人御仕置申付ル、

72 一右之類、(新)請人欠落致候ても、請人欠落以前三家主ニ預  
ケ置、其品訴於有之ハ、請人之可濟金・過料共ニ、家

主ニ申付ル、尤主人方請人を家主方え召連參預ル、

但、家主欠落者之店請人え懸り度旨願出候共、不取上、

73 一 請人欠落以後、主人ち断有之候とも、無取上、

74 一 取逃引負(之)欠落者、主人見合ニ本人を召連来ニおゐてハ、取逃者ハ前ニ有之通申付、右欠落者、当宿有之店請人取置候者、不慥(成)者之店請ニ立候品前以、過料、当宿店(請)も於不取上は、尤当宿過料、(右)取逃引負致候者、御仕置申付ル、

75 一 奉公人之請ニ立候者出入は、(其)家主引請取替相済、当人は致店立、又は門前払ニ成ル、其以後当人重て之住宿見届、元家主(右)立替於相済ハ、当人身代限り付、当家主えは、尤済方不申付、店賃滞候者を店立いたし、追て相懸り候共、前条之立かへ金子ハ(訳)違候付、相对次第申付之、

御評定所定書 卷ノ四

76 一 引負金百兩(以上)以下共ニ、当人并親類又ハ(ハ)可弁筋之者え(弁金)申付、少(々)も相済候上、引負人其分ニ差置、其者身上取立候節、主人願出候様ニ申付、身上

取立候段、主人於願出は、当人身代限り弁させ、身上持候度(々)幾度も弁させ候事、

77 一 引負(人)之親類其外ニも、弁金致候者無之、当人も可済手立も無之者は、五十數百之たゞき追放申付也、

78 一 引負人を請人え預置、欠落致させ候ニおゐてハ、其請人分限(ニより)并多過料、

79 一 輕キ者養娘致、遊女奉公等ニ出し候儀、実方ち願出候共、無取上、実子養子之無差別、親(之)仕方法外成義(有)も無之、子格別之難儀之筋於取計は、吟味有之也、

80 一 寺社之訴訟人、可届所え不断して願候類ハ、無取上、但、本寺觸頭之悪事又は非儀之申付等ニて、再応願候ても不叶時、奉行所え願出候へハ、品ニより吟味有之、

81 一 遠国之者、御当地え參、無宿(ニ)成、科無(之)類は勘当・領主構之無差別、領主え渡入、家来之召仕・道中荷物(持)ニ成候共、又ハ御当地ニて召仕、之内欠落致候共、其通之旨申渡引渡入也、

82 一 酒狂ニて人ニ疵付候者ハ、其主人え預置、疵平癒次第、疵之多少ニよらず、療治代中小姓(躰)は銀式枚、徒士

は金老両、足輕中間は銀老(枚)両指出させ、疵(被)附候者  
え為取之、但、療治代難出者は、刀脇差取上、被附疵  
候者え為取之也、

83 一酒狂(ニ)人と致打擲候者ハ、身上限り諸道具取上、  
打擲ニ逢候者え為取之、但シ、酒狂之儀、主人え断申  
候節、欠落と申立候共、主人方を罷出三日之内ニ候へ  
ハ、欠落ニ不相立也、

84 一酒狂ニテ諸道具を損さし候者ハ、過料出させ、損失之  
者え為取可申、輕キ身上之者ハ、身代限申付也、

85 一酒狂ニテ自分と疵付、外ニ科無之者は、疵不及養生、  
早速主人え引渡ス也、

86 一酒狂乱氣ニテ人を殺候共、下手人、但シ至て輕キ者を  
殺候ハ、品ニより御構無之、但シ主殺・親殺たり  
共、乱氣ニ無紛候ハ、死罪(一通り)、自滅致候者、  
死骸不及塩積取捨之、火(を)付、乱氣ニ紛無之候ハ、  
死罪、乱氣証抛分明ニ於無紛は、常之乱心之通申付  
也、

87 一百姓町人口論之上、相手理不尽之仕方ニテ、不得止事  
相手を殺候時、相手(方)之親類并其所之名主年寄等、

右被殺候者、平日不法者ニテ申分無之(三)付、下手人  
御免之儀願出申所、於無紛ハ、下手人ニ不及、追放、  
但シ武士奉公人ハ、其主人願無之候得共、(不)差免、

88 一重キ追放、御扶持人ハ御扶持上り、家屋敷・家財共ニ  
闕所、在方町方(ハ)田畑・家屋鋪・家財共闕所、  
89 一改易・中輕キ追放、御扶持人ハ御扶持・(家屋敷)上  
り、家財無構、在方町方ハ田畑・家屋鋪(上り)、家財  
(無構之)、共闕所、

90 一田畑取上候者、科重キハ、田畑・居屋敷共取上、科輕  
キハ、田畑計り取上、家財ハ不取上、(家)屋鋪計持、  
田畑無之者は、重キ過料、

91 一夫科有之、田畑取上ニ成候得は、妻之持參田畑も一所  
ニ取上ニ成、金銀杯持參候得ハ、当座ニ遣捨り候故、  
妻方え不戻、但シ妻之名所ニテ有之分ハ、可為格別  
也、

92 一身代限、居宅并藏・屋鋪共不殘取(上)之、他所ニ家藏  
有之分、諸財物は取上、家藏は無構之、

93 一科重候て、科之上戸(枚)、入墨之上擲、或は追放ニも二  
重(ニ)御仕置可申付也、

- 94 一 過料、身代も科之輕重ニ応し、過料員数増減可申付也、  
 但、至て輕キ者、過料を難出は、手鎖申付之、
- 95 一 牢舎申付(候)者を最初<sup>レ</sup>溜へ不遣、病人・行倒(者)は格別、
- 96 一 平日之出火之咎、火元、類焼之多少ニ寄三十日歟二十日歟十日押込、
- 97 一 大火之咎、火元五十日手鎖、火元之地主、屋鋪沽券(金)十分一之過料、火元(之)家主、三十日押込、風上式町・風脇式町左右式町、合六町、過料、
- 98 一 御成之節出火之咎、火元五十日手鎖、火元(之)家主三十日手鎖、月行事三十日押込、火元之家主地主屋敷沽券金十分一(之)過料、但シ、所之者早速消留メ候得共、火元之当人計、五十日手鎖、寺社門前町屋、其所買請又ハ借地致、町屋敷建置候者え、右之通過怠申付之、
- 99 一 火を付候者捕来、訴(人)ニ出候者ハ、御褒美銀三拾枚、并捕候同前之者ハ、銀貳(拾)枚被下之、
- 100 一 男女申合於相果は、死骸ハ不及弔取捨、一方存命ニ候ハ、下手人、双方存命ニ候ハ、三日さらし非人之手下ニ申付、主人と下人申合相果、<sup>(主)</sup>下人存命ニ候ハ、下手人に不及、非人之手下ニ申付ル也、
- 101 一 隠し遊女商売候者を、店(差)置候ハ、其屋鋪并(家財)・家藏共ニ取上之、遊女商売致候当人・家主共ニ、家財取上、百日手鎖、地主ハ)外ニ罷在、(家主計差置)候共、右同断、寺社門前も如斯也、
- 102 一 百姓町人一分ニ懸り候事ニて、何卒仕方も可有之儀を訴出、御家人知行御切米被召上候程之事ニ候ハ、其百姓町人科無之候共、其通ニは難成かるへし、相当之咎有へし、
- 103 一 旧悪之儀、御仕置ニ可成候得共、重キ盜或ハ人殺等之品杯、たとへ相止候得とも、さかにも無之候事也、<sup>(渡)</sup>浮世之為に悪事致シ一旦、其後不宜事と存、相止候段分明ニ付てハ、其品(を)立、過料又ハ相当之咎を申付也、
- 104 一 主殺・親殺之科人之子共ハ、伺之上申付ル、親類は構無之候得共、所え預置、本人落着之上、右之悪事企不存旨相決ニは差免、<sup>(此外)</sup>但シ火罪・磔等ニ成候者共之子
- 101 一 隠し遊女商売候者を、店(差)置候ハ、其屋鋪并(家財)・家藏共ニ取上之、遊女商売致候当人・家主共ニ、家財取上、百日手鎖、地主ハ)外ニ罷在、(家主計差置)候共、右同断、寺社門前も如斯也、

- 共、無構、右は町人百姓其(外)輕キ者共(之)事也、  
 105 一 拷問之事、致惡事候証拠(共)得共、当人白狀不致者、又ハ科は未相極候得共、外ニ惡事有之、分明ニ相知、其科計ニても可被行罪科者、右之外ニも詮儀之上、其品少シニても手筋相決候(固)て、其品ニ奇拷問申付、但、差口計ニて証拠(共)ニ無之、又は怪鋪存候一通ニては、不及拷問也、
- 106 一 盜ニ入、刃物ニて家内之者え疵付候者ハ、(疵之)多少ニよらず、此類獄門也、
- 107 一 盜ニ入、刃物ニてハ無之、何品ニて成共、家内之者え疵付候類ハ、死罪、右同様(共)、盜物ハ持主え相返候共、右之通申付、但し忍入候者、巧之儀(共)ニも無之、其品輕クハ、入墨之上重キ追放(敵)、
- 108 一 手元ニ有之品を不斗盜候類ハ、直段ニ積リ金子拾兩(て)位、都合此類は百擲(敵)或は五十擲(敵)、其品ニ寄、入墨之上追放、
- 109 一 盜物と不存買取反物、其外之類ニても、其色品ニて所持候ハ、勿論取返、被盜候者え可相返也、
- 110 一 盜取り候物買取代金、盜取遣捨候ハ、買取候者可為(入)
- 損金、盜人之雜物を以、右之代金可為償、尤代金所持(ハ)候者、買取候者え可相返也、
- 111 一 盜ニ逢、其盜人を捕來候ハ、被盜候品々、何方之者買取候共、勿論取戻シ可相渡、若其品手前ニ無之候ハ、買取候者より右代金償セ、盜人捕來候者え可渡也、
- 112 一 金子拾ひ候者訴出候ハ、三日さらし、主出候ハ、金主え半分(相渡し)、残ル半分ハ拾ひ候者え為取之、反物類ニて候は、其品不殘主え相渡し、拾ひ候者えハ、落シ候者(可致候)ハ相応之礼申付也、
- 113 一 落シ候物之主不相知候ハ、半年程見合、弥主不出候は、拾ひ候者え不殘為取之、
- 114 一 惡事有之者を捕候歟訴出候時、(右)惡党之者方ハ召捕訴出候者も惡事有之由申掛候得共、猥ニ不相糺、若本人ハ重キ惡事を証拠ニ於申ハ、(双方)詮議有之、惣て罪科之ものを訴出におゐては、同類たり共其罪を(被)免候事ニ付、可有作略也、
- 115 一 町方火札張紙等之事、右は畢竟先え難儀を懸可申為之事ニ偽之品ニ候間、其所ニて名主火中可仕、然共、致

張紙候者を見届ケ候は、召捕可差出、右風聞之義ニ付、言立られ候者を店立(致)ニおゐては、店立られ候、(申出)可訴出事相触きかすへきなり、

116 (一)重科人死骸塩詰之事、主殺・親殺ハ死骸塩詰礫、此

外之科ハ、死骸塩詰ニ不及、関所破り・重キ謀計之致方ニ依て、塩詰礫ニも成へし、)

御評定所御定書

卷ノ五

117 一 追放構国々所々、重キ追放、関東八ヶ国・山城・摂津・駿河・甲斐・尾張・紀州・堺・奈良・長崎・東海道・木曾路筋

118 一 中追放、江戸拾里四方・京・大坂・奈良(堺)・伏見・長崎・東海道(筋)・木曾海道・日光道中・(甲府)・名古屋・和歌山・水戸

119 一 輕キ追放、江戸拾里四方

但、御構之(国々)書付渡之、

120 一 評定所ニて追放申渡時ハ、御小人目付・町同心立会、常盤橋御門迄連行(追放)、屋鋪ニて追放ハ、徒士足輕召連、

121 一 死罪仕置除日之儀、急度御定無之、御精進日其外御祝儀事等有之日ハ、心を附相除、定日御精進日并朝日・十五日・廿八日・節句之外、相除分左之通、

正月廿一日 廿二日  
五月六日 廿八日  
六月四日  
御誕生日 閏七月十五日夜

十月廿一日  
十一月三日 六日 廿七日  
十二月廿一日 廿八日

122 一 過怠又ハ吟味之内手鎖逃シ候者ハ、品ニ寄、死罪或は遠島・追放、被頼逃シ候者、右同断、(外)  
123 一 死罪(三)可成者、致欠落、其身ヲ奉行所へ出候ハ、一等(を宥)、遠島、(三)

124 一 入牢之者、吟味之上科無之付相決候所、牢拔出におゐてハ、遠島也、(於及)

125 一 地頭方追放ニ相成候処、放強訴は、遠島、(於及)  
126 一 重キ事(三)付、跡方も無之儀を於申懸ハ、家財取上所払、或ハ重追放・遠島、輕(キ)義は過料、并過料滞ニ

- おゐてハ手鎖也、
- 127 一 出家ニ密通候由、不慥成義申掛ニおゐてハ、追放古例、
- 128 一 押て密会致し候出家、死罪、女ハ得心之儀無言といへとも、不埒ニ付髪を剃、親類ニ渡之、
- 129 一 御代官・地頭え背ニおゐてハ、其品輕クハ過料、申合所を於立退は、過料之上戸ゲ、其品重クハ追放、
- 130 一 御代官を背、(所を立退)、私領城下え相詰、於致強訴は、頭取は獄門或は死罪・遠島、
- 131 一 出家ニ不似合不謂儀ニ携え、品々於申出は袈裟取上、
- 132 一 養父同前之者え不慥成(儀)を申掛ハ、手鎖、
- 133 一 親殺害ニ逢候時、外ニ隠レ居候悴は、遠島、
- 134 一 下女自分として首縊相果候を、女之親類共、主人を盗人に申成、下手人之儀於致強訴は、獄門、
- 135 一 水帖を押隠し、過米於取立ハ、名主ハ死罪或は遠島、
- 136 一 百姓之下女致密通ニ付、兩人共(二)主人相殺といへとも、百姓ニ不似合仕方ニ付、戸ゲ之古例、
- 137 一 主人之女房伏居候所え忍ひ入、(又ハ)艶書を遣ニおゐてハ、死罪之古例、
- 138 一 主人之後家と下人、致密通ニおゐてハ、追放之古例、後家・下人共
- 139 一 妻下人と致密通おゐてハ、下人引廻シ之上獄門、妻ハ引廻シ(之上)死罪、
- 140 一 妻不作法致ニ付、男女共切殺といへとも、妻ニ不作法(妻)ニおゐてハ、妻之敵打とは難申ニ付、追放之古例、
- 141 一 下人ニ不作法之儀申付候主人、品ニ寄遠島、
- 142 一 致方も可有儀を、卒忽之仕方にて及殺害は、遠島又は追放、
- 143 一 預り候林を兄盜伐いたし、剩御林守え打懸候付、弟不得止事打殺といへとも、兄え対し卒忽ニ付、追放、
- 144 一 女房欠落致し、又外之者と夫婦ニ成ニおゐてハ、新吉原え永ク被下之、
- 145 一 主人之娘を、申合にて誘出ニおゐてハ、所払、
- 146 一 夫有之女、奉公之内傍輩と致密通おゐてハ、(男)女共ニ死罪、
- 147 一 夫有之処、外之者と夫婦ニ成ニおゐてハ、死罪、夫有之を男ハ不知といへとも、追放之古例、
- 148 一 煩はやり候由虚説を申出、札并無実之薬法を致流布に

おみてハ、引廻之上死罪之古例、

149 主人之女房と密通之上、右女を可切殺と元主人方え踏

込候者は、引廻し之上獄門、女は死罪、

150 抜身を持居候者を、踏込捕候ハ、御褒美被下、

151 主人之妻と致密通候処、下人助命之儀、夫願出(三)

付、非人手下ニ申付ル、女は新吉原え年季無限渡、

152 下請状致謀判候者は、死罪、

153 御構之地え立帰候ハ、死罪・遠島、人を切殺候者

ハ、獄門、

154 謀判を見逃ニ致、礼金等を取候者ハ、獄門、

155 輕キ御扶持人、獄門ニ成候時、悴追放、

156 盜可致ため、古主の屋鋪え忍ひ入候者ハ、死罪也。(入墨ニ重キ追放)

御評定所御定書

卷ノ六

157 一組下之者、博奕之宿為仕、宿錢之内取立、剩御代官ハ

呼使之家来を、大勢罷出打擲致所、不差留、誠(殊ニ)乍存不

訴出、其上頭取候者を指凶致、欠落為仕候名主は、於

其所引廻之上、獄門、

158 一博奕宿仕、剩自分儀留守之節、右呼使を打擲及騒動候

処、不訴出もの、獄門。(死罪)

159 一対伯父無筋儀申出ニおみてハ、死罪、

160 一辻番人、博奕之宿いたし、捨物(捨)を不訴、私(曲)ニ仕者

ハ、引廻シ遠島或は死罪、

161 一町人大小を指、奉行所え巧仕ニおみてハ、引廻シ獄

門、

162 一盜物(手)と不存、売払又は質物ニ置遣候者ハ、死罪、

163 一橋其外金物等を盜取候者、入墨之上重キ追放、

164 一謀書謀判・似せ金銀致候者、引廻し獄門或は磔、

165 一武家之供え突当り或は雜言等申者は、追放、

166 一重キ科之者も、悪党(もの)を指口致ニおみてハ、遠

島、

167 一横取金償、不埒之者、死罪、

168 一武家方家来、町人を切害立退候者、同家中え尋申付、

疵平癒候共、親類え療治代申付也、

169 一主人之妻(之)母切殺、密通之上之由雖申込、無証(之)擬ニ

付、引廻シ死罪、

170 一女房ニ疵付、平癒候は、理不尽ニ付、門前払、

171 一輕キ事(ニ)付、似セ手紙認候者ハ、家財取上所払、

172 一前方ニ科有之、追放ニ成候以後、御構之場所え致徘徊、

(其上)ゆすり事故ニおゐてハ、一等重可申付者ニ候得

共、博奕之儀依致訴人、本之如く追放、

173 一御家人死罪ニ候得ハ、子は遠島、

但、女子ハ親類え永預ケ、

174 一浪人村々え廻り、無謂合力を請、旅籠錢等も不払、村

繼人足を乞、召連通るニおゐてハ、獄門、(重キ追放)

175 一密夫と申合、本之夫を於致殺害は、女房は引廻之上

磔、密夫ハ獄門、

176 一重キ科之者、於牢死ハ、(マてマて)不致死罪骸磔、

177 一被害候者を致頓死候分ニ、不訴出ニおゐてハ、兄弟

其外名主(等)ハ、重キ追放、(其外ハ所払、)

178 一証拠なき儀申募、本寺触頭之申付を不用、第一人殺を

火附盗人と申掛ニおゐてハ、出家ハ脱衣追放、(賊)

評定書都合六卷終

右之通御評定

大御所様御代御当代御定書三百七拾余ヶ条は、元文二年巳

十一月、三奉行窺之上記之、

京・大坂・奈良・堺・伏見・長崎・佐渡・駿河・日光  
諸御代官所迄申達候御定書卷六冊之写、

寛延元年

【参考】対校本などの奥書

1 「評定所御定書」(国立公文書館内閣文庫蔵「雜留」第  
十四冊所載)

右三百七拾余箇条は、元文二年巳十一月、從三奉行窺  
之上、評定所之御定書也、

2 「御評定所御定書」(実践女子大学図書館奥村藤嗣文庫  
蔵)

右之通御評定 上様自代御当代御定書三百七十余ヶ条  
ハ、元文二巳十一月、三奉行窺之上記之、

宝曆四年西五月廿五日

右此本ハ相州大島村、中里平十郎殿ヨリ借用写  
之卜有、

3 「評定所御定書」(架蔵)

右三百七拾余ヶ条は、元文二年巳十一月從

三奉行窺之上、評定所之御定書也、

寛保三年亥五月

4 「斥政談」（『近世法制史料叢書』第三、昭和三十四年、

創文社所載）

右三百七拾ヶ条は、元文貳年巳十一月三奉行伺之上、

評定所之御定書也、此書物他見不成者也、

5 「元文秘録」（神宮文庫蔵内藤耻叟旧蔵本）

右三百七拾ヶ条、元文貳巳年十一月従

御奉行所窺之上、所定之御定書也、

附記 「御評定所御定書」六卷一冊（名古屋大学法学図書室蔵）の閲覧と利用に関しては、名古屋大学大学院法学研究科教

授神保文夫氏の御高配を悉くした。記して謝意を表するものである。